明治二十六年九月二十五日發行

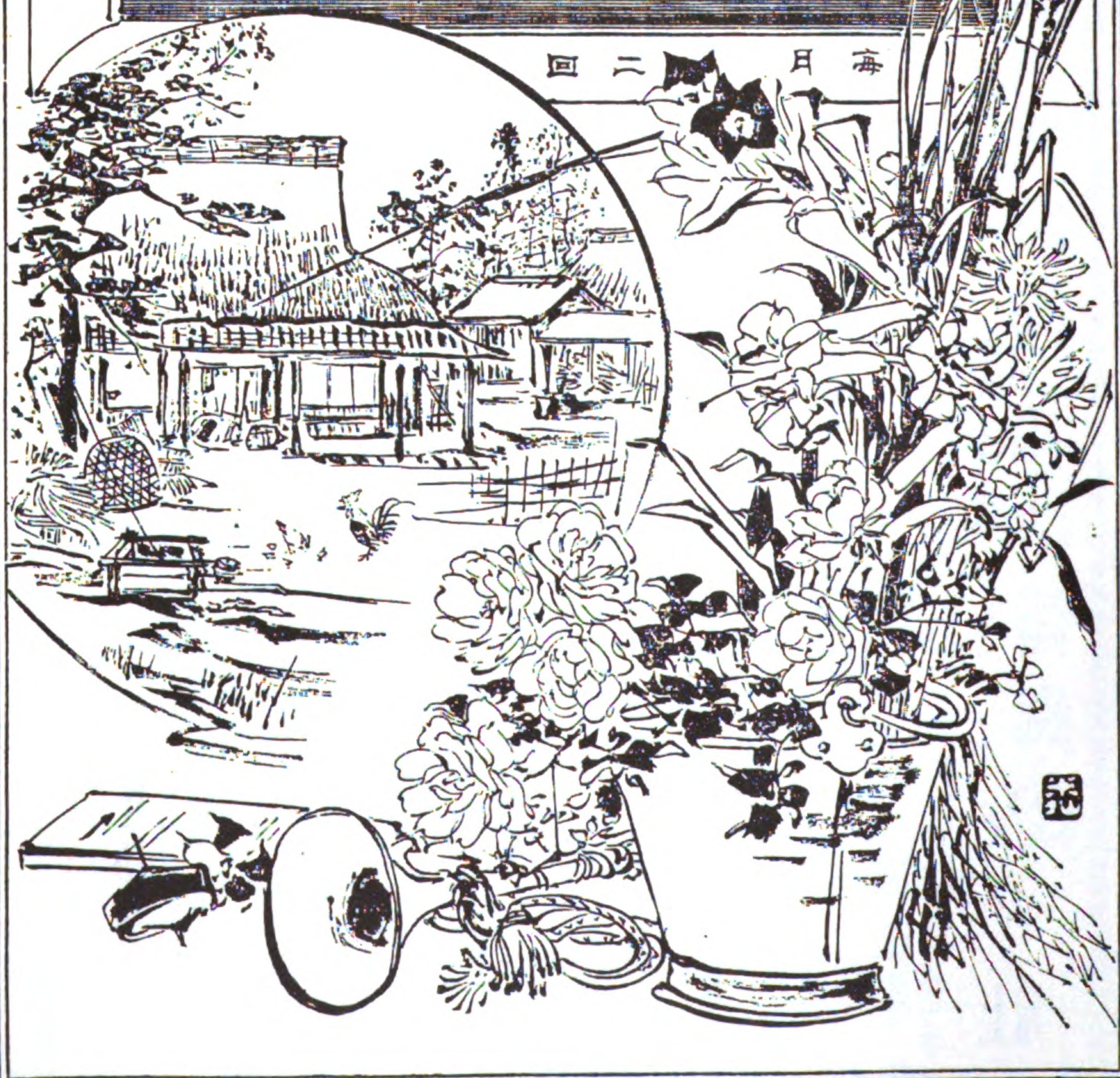
THE HOME JOURNAL

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價全五錢

每月二回



第拾四號

◎民友社出版書籍目錄◎

平田久著

十二文豪第一卷 カーライル

定價十八錢　郵稅四錢

早稻田文學の評に曰く此篇希世の文豪トマス、カーライルが一生の事業と其の經歷と特質とを趣味ある筆をもて叙説評論し頗る其の要を得たり案するに我が方今の社會何れの方面に於てもカーライルの如き勇猛の偉人を欠けること久し此の一冊子能く幾多の懦夫をして起たしむるを得ん則ち平田氏の功は尋常傳記家の功たるに止まらず

竹越與三郎著

十二文豪第二卷 マコウレー

定價十八錢　郵稅四錢

每日新聞の評に曰く行文華麗雄渾……竹越氏は平生最もマコウレーに同情を表せる一人なり……此筆を以て彼の傳記を叙す一度卷を開くやマ氏の性情、思想、經歷、文躰あきらかに現れ來るもの又故ある也マ氏の文を評して恰もパノラマの如し讀者をして中心に立ちて四方を望見するの感あらしむと云ふ此言はやがて著者自身の文章を評したるものと云ふべし……行文一瀉千里順風に帆を上げて行くが如きもの無理ならず

德富健次郎纂譯

グラッドストン

定價二十錢　郵稅四錢

八十四の老翁、六十餘年の政治生涯、三回の大宰相、性行人物、趣味、弱點、長所、履歷、紙上に躍動す。材料の精確、文章の婉宕は嘖々を待たず是迄人の評にせざりし少年時代の彼をも描きあり

平田久著

伊太利健國三傑

定價二十錢　郵稅四錢

此書最も精確なるオーツリチーに據り、伊太利建國の三傑マッチニー。カブール。ガリバルヂーの生涯を叙し且論す、三傑の性情畫くが如く、伊太利の形勢指すが如し。

德富健次郎纂譯

格(コ)武(ブ)電(デン)

定價二十錢　稅郵四錢

武(ブ)雷(ライ)土(ト)

定價十五錢　郵稅四錢

此兩書は英國近世二大平民政治家の性行、履歷を明麗の筆を以て詳に描出したるもの之を讀で利名動かす能はず清節雪の如く熱心火の如く包量海の如く性情卷に似たる無双の兩大人と手を執て相談するの感ある可し

竹越與三郎纂譯

格(ク)朗(ロム)穵(ウエル)

定價二十錢　郵稅四錢

歷史上の大難問、英國史の絕項、鐵騎の首領、大抗擊家、沈摯、崚嶒、雄烈の大改革家クロムウエルの傳は著者一氣呵成、雄麗明快の筆を以て述作せられたり

竹越與三郎著

新日本史 上

定價四十錢　郵稅六錢

新日本史 中

定價三十五錢　郵稅六錢

上卷に於ては過去廿年間の政變及び外交の歷史を說き盡し中卷には社會の組織より革命の源因を論じ皇位の三大變遷を論し一轉して大に思想の衝突を叙し其結果として社會の組織に大變化を來せるを論したり共に痛切破天荒俗流の見を破るに足る其他財政宗教の歷史も亦精確なり

福地源一郎著
幕府衰亡論
其の論は宛轉渾、其の文は雄容豐富、其の事は則ち實地目擊の所、歷史の快味は斯の如き好著に依つて知らるべきなり。
德富健次郎著

定價三十五錢
郵稅六錢

近世歐米
歷史之片影
現今有名なる政治家文學家軍人富豪其他の傑人の喜ぶべく愕くべき逸事逸話を最も正確なる出處によりて極めて風趣ある筆致を以て撰擇纂輯したるもの以て永晝長夜の好侶伴なるべし。

定價二十錢
郵稅四錢

平民叢書第一卷
十九世紀之大勢
目錄●十九世紀○十八世紀の地位○革命の時代○殖産界の革命○思想界の革命○道德的革命○佛國革命の大危機●第十九世紀○十九世紀の物質的進步○○物質的進步と文明○英國の物質的進步の思想界○○物質的進步の功德果して如何○物質的進步と貧富の懸隔○平民的大勢○政治上に於ける平民主義○佛國革命の反動○希望の時代

定價十二錢
郵稅二錢

平民叢書第二卷
世界經濟上之變動
目錄●第一章輓近經濟界の動亂○第二章生産、分配の新機關及其影響○第三章物價下落及其原因○第四章金銀比價の變動○第五章干涉保護政策と經濟的動亂○第六章現時歐羅巴諸國の商業政略○第七章經濟的變動の社會上に於ける影響○第八章勞働者の不平○第九章結論

定價十二錢
郵稅二錢

平民叢書第三卷
國家と政府
目錄緒論●第一編國家○第一章國家の概念○第二章國家の權力○第三章國家の目的○第四章國家の起原○第五章國體の種類●第二編國家の發達（第一章英國憲法制定史○第二章平民的國家●第三編政府○第一章政體の種類○第二章英米獨佛の政體●結論

定價十二錢
郵稅二錢

平民叢書第四卷
教育と遺傳
目次○緒論●第一章、道德本能と教育（一）生理的誘告、（二）心理的誘告、（三）德育と誘告●第二章、道德本能の發起、（一）道德力――意志、（二）道德の目的――義務、（三）道德的疾病、（四）道德本能の發達に於ける教育と遺傳●第三章、體育、（一）體育の必要、（二）腦の過勞、（三）手藝の練習●第四章、智育、（一）智育の地位及目的、（二）智育の方法●第五章、學校教育、（一）專一的智育の危險、（二）倫理學の教授、（三）道德的訓練、（四）市民教育、（五）審美的教育、（六）科學的教育、（七）競爭試驗の利害●第六章、女子教育と遺傳●第七章、作物轉換と教育●第八章、教育の極致、無限の進化●教育沿革史

定價十二錢
郵稅二錢

平民叢書第五卷
文明之弊及其救治
目錄○文明の起原及歸趣◎野蠻と文明○健全なる生活○人間の墮落○第二の樂園●文明と科學◎現時の科學○將來の科學○文明と道德

定價十二錢
郵稅二錢

平民叢書第六卷
現時之社會主義
目次●第一章、社會主義の種類●第二章、十九世紀以前の社會主義○（一）猶太及基督教の社會主義○（二）トマス、モーアよりルーソーまで○（三）新時代の號鐘●第三章、十九世紀前半の社會主義○（一）サン、シモン及シモン派○（二）カーライルの社會主義○（三）フーリールの共同組合制○（四）ルイ、ブランの勞働組織○（五）ミルの社會主義●第四章、新社會主義の勃興○（一）獨逸社會黨の始祖フェルザナンド、ラサトレ○（二）新社會主義の經典マルクスの資本論○（三）社會黨最近の運動○（四）瑞士亞虛無黨●第五章、新ユートピヤ○（一）公有制度○（二）富の分配○（三）物價及貨幣●第六章、實行的社會主義○（一）非ユートピヤ○（二）社會主義的立法○（三）勞働者保護○（四）官設事業●第七章、社會主義の前途

定價十二錢
郵稅二錢

佛國アーミー著　深井英五譯
英米佛比較憲法論
英米佛比較憲法論は原文極めて簡潔明快譯文亦直截簡明を旨としたれば普通法律書の如く詰屈聱牙無味乾燥砂を嚙むが如き患なく何人も快讀流讀以て其妙味を了す可し讀者親く卷に對して共然るを知れ

定價二十錢
郵稅四錢

高橋五郎著

排僞哲學論

定價十二錢　郵稅二錢

「鉄斧解剖死豚腸」とは此書を評する爲めに咏せられたる一句なり流石の豚も舶來ベンにや食傷しけん五臟の內より半消化のレナンの骨もベーコンの皮もべらべら然として出でにけり人若し宗教衝突論の辨駁中最も精確に最も痛快なるものを問はゞ排僞哲學論を以て答へん。毎日新聞云ふ

梶原保人著

政黨論

定價二十五錢　郵稅四錢

政黨の人性自然に發生するをより其利害得失離合變遷組織及歷史等を詳論し進んで政治上及大臣責任上より政黨內閣の自然必然の制度なるを證論す

ゼームス、ブライス著　人見一太郎譯

平民政治

特別廉價二圓五拾錢　無遞送料

著者の學識淵博、觀察鋭敏、判斷公明、推論精到の士にして本書の第十九世紀の尾端に於ける超群絕倫の大著述たるとは天下識者の異口同音に證明する所本書の價値今復た呶々せず

德富猪一郎編纂　久保田米僊畵

誕生日

定價十五錢　郵稅二錢

詩あり、歌あり、語あり、句あり、美麗なる挿畵あり、父母親戚朋友弟妹の手蹟帖として、清潔高美なる家族の間に、薰風の吹て、紗簾に入るが如く、幸福、和樂、融怡、平康の福音を齎すものは則ち是れ。

一語千金

定價五錢　郵稅二錢

言葉は生命也。大人豪傑の死せずと云ふ他なし。其精華たる言葉の萬世に向て活動するが爲也

德富猪一郎著

國民叢書

靜思餘錄

定價十五錢　郵稅二錢

早稻田文學に曰く民友氏が人生諸般の現象に對する意見の精英を網羅し得たり其の「希望」を說き「非厭世」を說き「インスピレーション」を論じ「天地悠々」を唱ひ「快樂」「觀察」を語るや時に哲理の幽玄に接し時に宗教の神聖に觸る或は古希臘の哲理を談ずるものの如く或は希望の務教を宣ぶるものの如し而して其所謂詩人にあらざるの詩人の詩は「故鄉」「故鄉春色今奈何」「老人と小兒」等の諸篇をもて最とす

德富猪一郎著

國民叢書

人物管見

定價十五錢　郵稅二錢

一管の筆解剖、刀よりも銳なり、我政治家事業家文學家の重なる者を將て縱橫に論じ仔細に剖つ脉理骨髓恰も庖丁の牛の如くに解き去りたる文學界の一大奇觀は是也

人見一太郎著

國民的大問題

定價二十錢　郵稅四錢

經濟雜誌の評に曰く著者は民友社の年少卓見家人見一太郎君なり、君の識見を以て目下の急務たる條約改正問題を論ずる文辭通俗なりと雖も、讀んで憤慨の氣自から其中に籠れるを知るべし、況んや我國の外國條約の淵源する所を調べ、文書事實に就いて考證したる有益の書なるをや、但君の論を實地に行はんとは、政府否一般日本人民の手腕と度胸にあるのみ、

人見一太郎著

第二之維新

定價十錢　郵稅二錢

革新の大精神を鼓舞し革新の前路を遮る惡魔を掃蕩す、淋々漓々の精神滿卷に溢れて筆千丈の虹の如し。

德富猪一郎著

日本國防論

定價十五錢　郵稅二錢

經世實用の大文字。志士必讀の書。

不羈

國民新聞

獨立

廣告料改正

餘義なき必要は我社をして廣告料の直上げをなさゝるを得ざらしむ。これ實に止むを得ざるなり。高きに上つて號呼するものは其の喉を勞すること少なくして其の聲の徹する功や大なり。されど高きに上るには價を拂はざるべからず。大なる機械を用ひて生産の業に從事するものは小さき機械を用ふるものよりも利する所ろ多し、されど大なる機械を購ふには大なる價を拂はざるべからず。兎かく大なる價を拂ふと雖、其の利する所ろの多き、價を拂つて猶ほ餘りある也、されば遠く聞かれんと欲する者は高きに上るの勞を辭せず、大なる産業を起さんと欲するものは大なる機械を購ふの費を惜まず、これ實に餘義なき必要の理なればなり。我が社をして廣告料の直上をなさゝるを得ざらしむる餘義なき必要の理も此に外ならず。我が國民新聞、創立以來既に四たびの春と三たびの秋を經、今や四たびの秋に入らんとし、停止、禁錮、罰金、の災厄踵き至るの間にあつて號を重ぬると既に一千一百。其の議論報道夙に機敏明快を以て稱せられ、都人に愛讀せられ、鄙人にも愛讀せられ、紳士に愛讀せられ、貴女に愛讀せらる。其の位地や堅く且つ高し。我新聞昔日の新聞ならば則ち止む。既に昔日の新聞にあらず、進歩しまた進歩し今日の固く高き地位に達したりとすれば、其の議論に於て高き地位に達し、其の報道に於て高き地位に達し、新聞全躰として高き地位に達したりとすれば、豈に獨り廣告に於てのみ昔日の躰を保つべけんや。廣告料の直上げ實に止むを得ざる也。即ち來十月一日を以て左の如く改正す。

一回一行十三錢　二回以上十二錢　五回以上十錢

廣告依頼者諸彦請ふ之を諒せよ。思ふに繁昌の神の愛顧を得んとして廣告せらるゝ諸君は、益々繁昌に向ひつゝある新聞によつて繁昌の神を迎ふることを嫌はれざるべし。古語に有之、德不孤必有隣。

明治二十六年九月

東京市京橋區日吉町四番地

國民新聞社

明治二十六年九月廿五日發行

家庭雜誌第拾四號

目錄



家庭雜誌第拾四號

（明治二十六年九月廿五日發兌）

社説



家庭の伴侶

家庭に備へ置く書籍の事

最と淋しき村里の茅屋に、幽なる燈光漏れて、兒童の琅々たる讀書の聲聞ゆる程床しきものはあらじ。

家に讀書の兒あるは、家の幸福なり、字を識る憂患の初めと云ふは、世をすねたる激語のみ。ハスリス曰く『書は風の如く、心中に吹き入る。詩人の句は、體中の血に混し、動盪して流る』と、誠なるかな斯言。

書を讀むは、獨り己れか知らざる所を知るのみならず、獨り見聞を廣くするのみならず、獨り才智を磨くのみならず。又た其の性情を養ひ、志を勁ふし、心を清ふし、憂を慰め、煩を解き、之を大にしては、天地の心を覗ひ、之を小にしては、一身の安心を得、洵に精神上の糧食と云ふ可し。

されば老人も讀む可し、小兒も讀む可し、壯夫婦は言ふ迄もなし。一家には必らずそれ相應の小書籍館、別言すれは書物の備へあると、決して欠く可らざる也。其の欠く可らざるは、米櫃、膳、椀、陶器、鍋、釜等の欠く可らざるか如し。但た彼れは肉體を養ふに必要にして、此は精神を養ふに必要なるの相違あるのみ。』

然らは如何なる書物を備へ置く可き乎、此れに就ては家の位地によりて、多少の變化を免れさる可し。されと一般に通して必要なるは。

修身道德に關する書籍にして、新舊約書、論語、孟子、

大學中庸の類、及ひ此等に關する手近き嘉言善行を集めたるものならん。例せは『心の清きものは幸ひなり』『言忠信行篤敬』と云ふか如き金言は、修身之を服膺す可きものにして、兒童の時より、斯る金言を誦讀せしむる時には、知らす識らすの間に、其の徳性を養ふや火を睹るより明かなり。米國の大統領アダムス、嘗て幼き時慈母の膝下に跪き、『主の祈』を覆誦したる事を想起して曰く、『余かの修身の基礎實に此に在りき』と。何人にも斯る例しあるぞかし。』次きには善人君子の傳記類なり。大人を知るは、大人たらんと欲するの初歩なり。義經、正成、清正の昔噺か、如何に我か國民の氣風を養成したるかを知らは、



必らす吾人か言の偶然ならさるを知らん。歴史も亦た然りと爲す、歴史は國民の傳記なればなり。旅行記、冒險談、若しくは寓言の如きも亦た必要と云はさる可らす。『ロビンソン、クルーソ』の漂流記、及ひ『イソップ寓言』の如き、如何に其の力ある感化を英國の家庭に及ぼしたるよ。衛生、植物、博物、理化學、經濟學、地理學等、凡そ人間の生活、及ひ生活に接近する初歩の學識に入用なる書籍も、成る可くは備へ置きたし。或は又た詩歌、音曲、繪畫等、所謂る美術的敎養に必要なるもの、成る可く備へ置かさる可らす。如何に唐詩選、百人一首等か、從來我か家庭に一種の敎化力を有せしかを知らは、今後に於ても亦た知る可し。

然れとも是非共、趣味の高雅にして、情思の健全なるものを撰擇す可きは、固より論を待たさる也。特に小說に於て最も然りとす。淫猥野鄙なる小說は、實に精神上の毒藥なり、之を家に備へ、之を子女に玩はしむるは、家に毒藥を備へ、子女に毒藥を玩はしむるが如し。然れとも善良なる小說は、事實の上に於て人を敎誨す、無意識的に人を開導す。識者或はユーゴが傑作『哀史』をは、聖書の註釋と嘆美するも、此邊の意味と知る可し。故に小說も種類によりては、書籍中の必要品とせさる可らす。

兎角一家の內に於て、讀書を等閑にし、他の什器には金錢を使用するに勇にして、書籍にのみ金錢を使用するとを愛むものあり。實に物の輕重を知らさるものと云ふ可し。肉体の糧食と、肉体の快樂には、金錢を徒費するも顧りみすして、精神の糧食と、精神の快樂には、其の必要の經費さへ出すを遲疑するは、決して思慮分別ある人の爲す所にあらす。

歐洲より米國中部なる荒漠無人の原野に移住し、手斧と砲銃とを携へて、丸木小屋に獨居する移住人すら、聖書と、セッキスピアー集、マコレー英國史は、側を離さずと云ふにあらずや。書籍は人の最も恒久なる伴侶なり、既に然り家庭に於て豈に一日も此の伴侶なくして可ならんや。

史談

（一）斷頭臺上の婦人

佛蘭西のマダム、ド、スタアル女史は大奈破烈翁も恐れし程の婦人なりけり。一日奈破烈翁は女史に向ひ、婦人は一切政治に關係す可からずと云ひけるに、女史色を作して答へて曰く、誠に左樣に候はむ、然りながら婦人とても何の故を以て吾は頸切らるゝかと云ふ位の

事は知らでは叶ひ侍らじ」と。是時は佛國大革命のすぐ後にして、彼革命中容赦もなく斷頭機にかけられし王黨美人の碧血猶未だ乾かざる折りの事なりければ、スタアル女史は此言を以て答へたるなり。

羅綺にだもたへざる繊弱なる婦人の、一たび變に遭ひ難に際して男子も愧づ可き勇氣をあらはすは、古來常に見る所の事實にて、佛國革命中斷頭臺に上されし幾多の婦人の擧動に徴するも、容易に知るを得可し。

皇女モナコは革命の犠牲となりし一人なり。斷頭臺に上る可き召喚の來る其朝、遺髮を子供に殘さんとて鋏を乞ひけれども更に得ざりければ、窓の玻璃を打破り、玻璃の破片を拾つて髮を截ち、心知れる者に托して其兒子に送り、然る後煮へ返へりたる臙脂の壺をとつて双頬に押し當て、之を爛らしぬ。其仔細を問へば、答へて曰ひぬ、若し斷頭臺に上る時に到りて思はず勇氣挫くることもあらむ時、衆人に其の誰人なるかを知らしめざる爲めなり」と。

「吁自由よ、如何なる罪惡も爾の名によつて行はるゝか」との絶命の詞をとゞめたる革命時代の一流の名婦人ローラン夫人に到ては、素より言ふまでもなし。死刑に處せらるゝの日、他の一男囚と共に刑場に赴むくに、其男子恐怖戰慄足地を踏まず。已に斷頭臺下に達して、ローラン夫人は先づ其男子を乞ふて臺に上らしめて曰く、請ふ貴下先づ臺に上られよ、貴下は妾が刑に就くの狀を見るにたへざる可し、且つ貴下は紳士なれば婦人最後の要求を容るゝに吝ならざる可し」と。即ち先づ其男子を刑に就しめ、終つて笑つて頭を斷頭機上に置きぬ。

（二）孛露士亞の皇后ルイザ

北日耳曼に遊ぶ外人は、何れの町の店にも皇后ルイザと題せる畫像を掲げざるなく、幾多の街區幾多の名勝

往々にしてルイザの名を附しあるを見て、必らず問ふめり『斯く日耳曼人の崇拜するルイザ后とは何如なる人ぞ』と。

今は已に九十年ばかりの昔となりぬ、十九世紀の大魔王ナポレオンの勢方に熾にして、歐洲列國の君主皆其鼻息を覗ふて喜憂をなせる頃、孛露士亞王に后あり、ルイザと呼びぬ。容貌は歐洲一の美人と稱へられ、品格は真に女王の位にふさわしく、德行は以て人の妻たり母たるに足り、其愛國の氣象に到ては、眇たる一小國の力を以て奈破烈翁に抵抗するを恐れず、其良人のやゝともすれば非戰觀望主義に流るゝを慨せる程の烈婦なりき。露墺同盟の軍アウストリッツに於てナポレオンの爲めに大敗北を受くるや、后ルイザは猶幼なき二子を膝前に呼びて曰く、爾等今より佛國に復讎す可きことを忘るゝなかれ」と。第二子時に年八歳、果して小耳に此一言をはさみけるにや、否や、其は知る可からざるも、此れより六十餘年の後、同じ敵の名を帶ぶる三世ナポレオンを擊破つて佛國の頭を十分に蹂躙したる者は實に此小兒なりけり。實に日耳曼帝國再興の明君と仰がれし維廉一世は、此后の第二子なりき。

已にしてナポレオンの第一勁敵たる英國の名宰相ウィリヤムピットは死し、奈破烈翁は二十萬の兵を提げて直ちに孛露士亞に侵入し來れり。此危急の際に於て國后ルイザは實に一國の魂なりき。其金髮の輝く所、其花顏の照る所、三軍の士氣愈振ひぬ。孛國の一將軍書を廷臣に送つて曰く、足下願はくは皇后陛下を御勸め申して當地に駐在ある樣計はれよ、陛下の御駐在は軍氣の興廢に關す」と。然も如何せむ、奈翁の大軍は萬づの障礙を押し破つて、千八百〇六年秋十月勝誇つたる奈翁は伯林に押入り、王宮を占領し、后ルイザの室を搜索し、其書翰を讀み、狼籍到らざる所なきが上に、猶も女后の勢力感化を殺がむと、ルイザ后の佛帝に抵

抗するは愛國の爲めにあらずして唯好男子の脊高き露國皇帝に對する戀慕の情よりなり」など途方もなき流言を播かしめたり。國破れ、家荒され、其上吾神聖の婦德の上にまで斯る暴逆の祟を受けし慷慨なる后ルイザの悲憤や如何なる可きぞ。

終に奈翁と露帝と孛王とチルシットに會して平和の條約を取結ぶとゝなりぬ。然るに奈翁は孛露士亞を押潰さむと尤も無理なる條件を云ひ出で、孛國中要害の固めある市府は素よりエルブ河に臨むマグデベルヒの要寨をさへ要求せしかば、孛王並に孛廷の諸大臣大に患へ、女后の來りて談判あらば少しは奈翁の意を和ぐるともあらむとて、孛王は急に書を飛ばしてルイザ后を招かれたり。后、書を得て無念の涙ハラ／＼と紙上に落ちぬ。國の仇、家の仇、然かのみ今が今迄も吾私德の上に就て尤もいまはしき風評を云ひふらしたる一身の仇、其仇の前に叩頭して和議を求むる、爭で氣慨ある后の忍び得る所ならむや。然れど今は國家存亡の危機、已むを得ず車を驅つてチルシットに赴きぬ。

チルシットに於ける奈翁と孛國皇后ルイザの對面は歷史上に有名なる一段なり。此對面の間、ルイザ后は女后の品格と婦人の品格を寸毫も墮さず、孛國人民の爲め良人の爲めに辨ずる時は胸迫り涙墜つるも、冷靜沈着始終禮儀を失はざりき。話次奈翁は問ふて曰く、左は然りながら其許には何故斯る弱兵乏資を以て吾軍に敵せんとは爲し玉ひしぞ」と。ルイザ后答へて曰く、祖父フレデリッヒ大王の榮光に眼の眩みたる故にこそ候はめ」と。次の日宴席に於て奈翁一朶の柑花をとつて之をルイザ后に贈らんとす。后答へて曰く、多謝──請ふ花と共に我マグデベルヒを與へよ」と。マグデベルヒは孛の要害の地、奈翁之を沒收せんと欲し居たる所なり。奈翁は殆んど之を與へむかと二の足踏みたる由彼に從へる外交家タアリーランは言へるも、終に思ひ返

へして奈翁は唯蜜柑の花をのみルイザ后に與へぬ。已に奈翁に辭別して出づるの後、后慣然獨語して曰く、吾れ欺かれたり」と。昔者英の女皇メーリー佛のカレースを取り已にして已むことを得ず之を佛國に渡すの後、常に傍人に語つて曰く、若し吾心臓を剖き見ば、必らずカレースと云へる語の血文字を以て心臓に彫られあるを見ん」と。惟ふにルイザ后の心臓亦マクデベルヒの血文字ありしならむ。ルイザ后去るの後、奈翁は謀臣タアリーランに謂て曰く、美人には亦逢はむ、品位ある女后には亦逢ふこともあらむ、然れど余は斯くの如く稱賛す可き女后シカモ斯くの如く珍らしき婦人に逢へるは、前後唯今回を以て限とす」と。流石の奈翁もルイザ后の前には斯くの如く心折せり。

孛國の爲に尤も不利なる平和の條約は調印せられ、千八百〇九年十二月王、后車を並べて伯林に歸りしが、翌年の夏后は心臓の病によつて三十五歳を一期として逝きぬ。王より國民に到るまで皆謂へり、后は國家に殉せりと。其墓はシャルロッテンベルヒに建てられ、名工ラウヒの彫刻せる純白大理石の塑像其の上に立てり。

后の歿後四年、孛露二邦の軍同盟して大にナポレオンを破るや、孛王は先づ勝利の月桂冠を齎らし來つて之を亡妻の墓にかけぬ。而して后の逝きし六十年の周忌に際し、まさに普佛戰爭に出陣するの時に臨み、此墓前に來つて久しく拜跪默念せし白髪颯爽たる老將は、實に后の第二子一世帝維廉なりき。



文藝

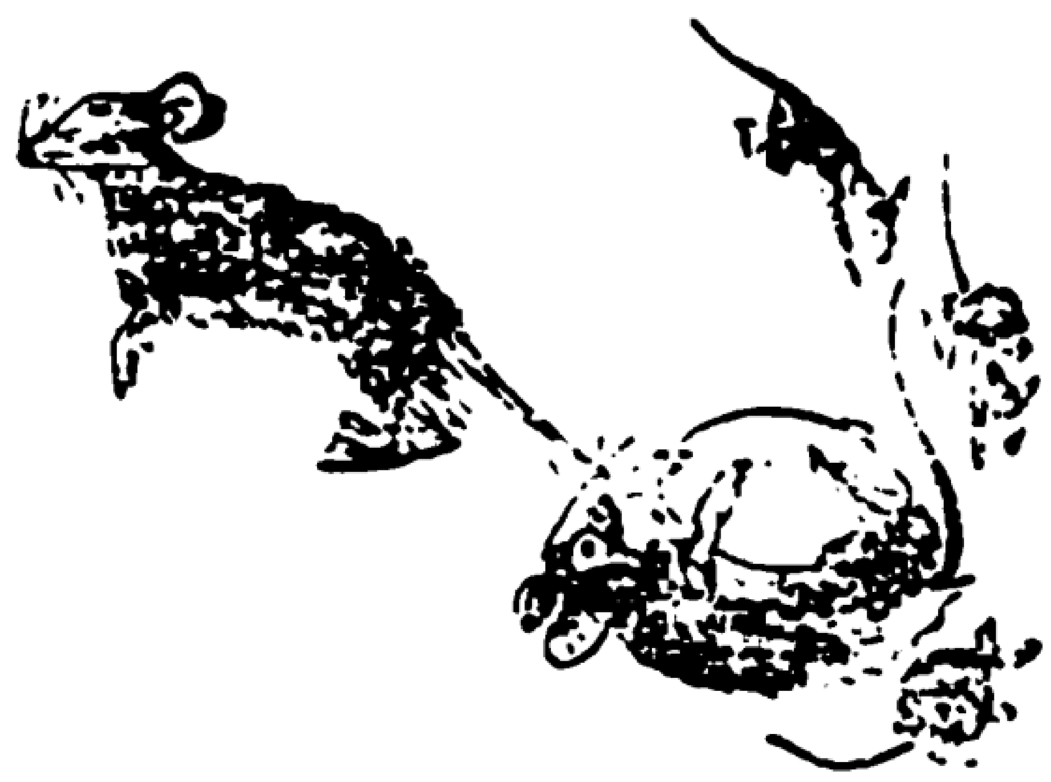
寓意談

嬉戯のや主人

両鼠の會話

一疋の鼠他の一疋に向て、

今日は好お天氣様、時にね、私は實に耳よりの噂を聞ましたよ。あの猫の畜生が、昨日と歟、昨夜と歟、獅子の爪にかゝりて、今は九死一生ださうです。若此話が眞なら今晩から大手を振て、遠慮なく臺所へ出て働けますわい。



他の鼠之に答へて、

否、私の愛らしき友よ、左様お喜びなさるな、拙者の智慧で考へて見る、と此噂は吃度誰歟の捏造ですよ、信用は出來ませんぜ、又實説とした所が、考へて御覧じろ、獅子が猫に打勝ます歟、却て獅子の生死が覺束ないです、世の中は如何程廣いと申して、猫より強い者はございません。

紙鳶

或紙鳶風に乗じて空高く揚り、意氣傲然として下界を見おろして居たが、ふと山谷の間を、翩々と飛び廻はる蝶を見て、



おい蝶さん、否さ蝶君、君は不愍な者だぜ、予の目から君を見る、と豆の様に小さくて、居るのだ歟、居らぬのだ歟分りはしない、私の斯高く飛んでゆくのを見たら、嘸君は羨しからうなあ、

左様さ、羨しいと云ひたいが、ちと云ひ憎い所が在るので困まるのさ、何故なら、見いさい、君の位置は成程お高いのはお高いが、其お高いのは君自身のお力ではなく、君をお繋なさる糸様のお力だもの若し糸がふッと切れたら最後君は如何遊ばすね、其先の有様が聞たいねへ、實に斯様な生活で満足して居るのは、呆れかへるの頬被ぶり、向ふの見えない極點だぜ。成程其は私は何時も卑い所に居るのさ、なれど有難い事には不羈獨立の身で、誰の制御も受ず、飛びたい所へ飛びゆき、行きたい所へ飛びゆきますのさ、ハイ、君の様に人のなぐさみ物となッて、高い位置を得たのとは、少々質が違ひます。

白鳥、海老、及ひ鰯

荷物をある所から或所へ運ばうといふので、表題の三人共之を車に乘せ、金剛力を出して、エンサカホイと懸聲で引出しました。なれども車は一歩も前へは出ません。何故でせう？、通行の人之を見て笑て申すには、車の前へ出ないのは當然だ、何故なら、白鳥は上へ〳〵と飛びたがり、鰯は前へ前へと進みたがり、海老は後へ〳〵と退りたがる、各力の入所が違ふのだもの。

猫及び料理人

或家の無學でない料理人が、或日の事、家には鼠の出て竊盗しない爲め、猫に番兵の役を仰せ附け、或居酒屋へがぶとひッかけに出掛ました。（蓋し此日は彼の親の命日歟、其とも之に托したもの歟、私は知らぬが）酒癖悪き料理人、やがて一杯機嫌で歸て來たが、家へ這入ッて見れば、こはそも如何に、床には麪包の食掛



やら、牛肉の切端やら、から、一面に取散して在て一見

大盜賊の入ッた事と分りました。其にしても番兵の猫は如何したらう、彼程予が言付て置たに、と四邊を見廻はせば、猫は臺所の隅の醬油樽の上で、ごろ〳〵喉を鳴しながら、頭を左右にふり〳〵、小鷄をむしやむしやとヤッて樂しんで居ります。そこで料理人大に怒て、猫の耳に向て申すには、

此食抜の泥棒め、主人に大事な番兵の役を仰付かりながら、主人の物を盜むとは何の事だ、(此時猫は平氣の貌で小鷄を食て居ます)實に今日迄予は手前を正直の猫だと思ひ、又隣のお婆樣だッて手前の事を譽めて、他の惡猫を戒しむるにも、必ず手前を手本に引たものだ、然るに豈圖らん、今日の此仕業は何だ、チエッ畜生め、何といふ耻知らずの野郎だらう、之が世間へでも知て見ろ、大變だぞ、手前を見て、あれ泥棒が、あれ厄病神が、と忌きらはれて、何處でも手前は寄付ぬぞ、又其で事が濟めば善が、乾度世間の奴は手前を禁錮して、一歩も外へ出すなと言ひ付るだらう、(猫は聞て分りましたらう歟、多分分りましたらう、然し小鷄を食ふのは依然として元の通りです。)

猫を勸化しやうと思ふて此能辯家、之より古今の實例どもを引證して、立板に水を流すが如く說法しました。けれど此雄辯の終ッた頃には、猫はもう小鷄を食ひ盡して、鼻で床を嗅で居りました。

鼠の會議

多くの鼠が或る時會議を開く催しをしました。其は衆智を集め、奇計を案出して、猫は申すに及ばず、料理番、鍵番等を狼狽させ、而して社會に非常の名聲を得たいといふ爲めでした、然して先づ約束していふには、抑も當會の議員たる者は、必ず尾の全身より長きを要す、若短き者は、假如戰爭に據りて失ひしものと雖も本會の議員たる事を得ず、(私は何故に鼠族が長尾者



のみと撰ぶ歟、其理は知りません、勿論人間界では、髭髯の格好、衣服の模様に因て、利口と馬鹿とを識別するのが世間法であるが、鼠の仲間が何故長尾者を以て才あり智ありとする歟は、如何も分りません、多分深長の原因があるのでせう）と斯いふ約束を結び、粉名箱の一隅を議場と定め、夜に入ると共に沓々此處に集りました、事を議するに先だちて一疋の若鼠起ち、議長を呼びて發言して曰く、議題に取掛らざる前、一言申し述度事あり、其故は彼處の一隅に一疋の尾なき鼠あり、彼をして此席に列せしむるは、抑も如何なる理由に據るぞや、余等の始めに約する所は、長尾者のみ集會する事を得といふに非ずや、然るに今然らざるものは何故ぞ、抑も約束を守るを以て主とす守らざるが如きは約束なきに若かず、議長よ、速かに彼予の尾さへ保護する事を知らざる愚者を退けよ、然らざれば決議の上約束を結ぶ事有りとするも、又之に反むく者の有るを恐る、

議長此言を聞くや、叱咤して曰く、默れ、青二才、汝の口を容るゝ所でない、彼は予の伯父だわい。

情實の弊は鼠族の間にも

前回の續稿は後號に讓る

親子遊び

鐵面老爺

後かけ草履をはきて球のまろぶが如く走るものは生れて一年八ヶ月になれる我家の稚兒なり、今茲九月十四日余はこの稚兒を拉れて上野淺草兩公園に遊びぬ、家を出でたるは朝八時なり、新橋より鐵道馬車に乗り

て行く、稚兒は馬車中に立ちて廣告の繪など仰ぎ視て樂しみつゝありしが、京橋より三歳ばかりの稚兒を拉れたる一婦人乘り込みしが、其兒は手に大なる菓子を持ちて噛りつゝありしゆゑ、廣告の繪をめでゝ餘念なかりし我兒の眼は忽ちこれに移り、大にうらやみて終に泣き出せり、余は今更菓子を携へ來らざるを悔ゐぬ、かくて彼の婦人は一個の菓子を懷より取り出して、我兒に與へたり、余は一個の菓子に對して頻りに感謝を述べぬ、我兒は我武者なり、彼の兒が未だ半ばを食はざるの前に、早く一個を食ひ了れり、余は我兒が又た羨ましげに見んことを恐れて、兒顔を彼兒に背け、廣告を指して兒心を食慾より離れしめぬ、既にして馬車は萬世橋に着しければ、車掌は言へり、上野へ御出での御方は前の馬車へ乘り換へられよと、衆くの客は乘り換へぬ、菓子を持ちたる兒も母に抱かれて乘り換へぬ、余は獨り同じ馬車に留まりぬ、我兒をして再び菓子を持てる兒を見しむることを恐れたれば、

斯くて四五六七の客の乘り込むと同時に馬車は一直線に上野に向ひ、程なく山下へ着きぬ、余は兒を抱きて山王臺に登り、廣平の地に兒を置けり、兒は直に球のころぶが如く走り始めたり、東の方なる柵邊に至りて、停車場前の景を眺め、馬車人力車の走り行くを眺めて、此處に久しく留まり動くべくも見へざれば、余は再び兒を廣地の中央に抱き來り、兒を歩ましむるの一方便として大樹の幹に身を匿くして兒を呼べり、兒は余を捜さんとて走り來るなり、斯くすること數十度にして、彫刻競技會の前まで來りぬ、兒はパン〱と叫べり、余は茶屋に就きてパンはありやと尋ねたれども、パンは無しカステーラと羊羹のみありと答へぬ、余はカステーラを買ひて兒に食はせながら、三宜亭(?)の後邊まで行きぬ、かくてまた大樹の幹に身を匿くして兒を呼びしが、兒は余が身を匿くしたる喬松をば、根元よ

り梢頭まで見上げんとして、此樹の彼が見上ぐるには餘り高かりし爲め、足元よろめきて倒れぬ、
動物園に入りては、虎も豹も彼よりニャア〳〵(猫)と呼ばれ、熊も羊もワン〳〵(犬)と呼ばれ、鹿も馬と呼ばれたり、鷄は彼の熟識なるが爲め十數個の礫を投げられ、金魚も亦和知なるが爲めにオ、クウ魚チイチヤイ魚など丶大小を品評せられぬ。
かくて動物園を出で丶腕車に乘る、彼は余の帽子を借りて玩びつ丶ありしが、ガタ〳〵と搖れる車を搖籃の心地にて熟睡なしぬ、ほどなく淺草公園に着したるが、熟睡なしたる彼は車夫に抱かれて鰻屋に入りぬ、彼は忽ち眠をさまし、シボ〳〵したる眼にてあたりを見廻はし、傍人の食し居るを見て魚々と呼べり、されど命じたるものは急に來らず、さきに食ひ殘したるカステーラを與へたりしが、彼は物たらぬ顔つきにて、噛りては投ぐると數回、既にして鰻飯は漸く余の前に到れり、先づ蓋をとりしは彼なり、ニコ〳〵と喜び笑ひて魚々と呼び、一人前の四分の一は彼の腹に入りぬ、

（未完）

蕃山、藤樹を訪ふ

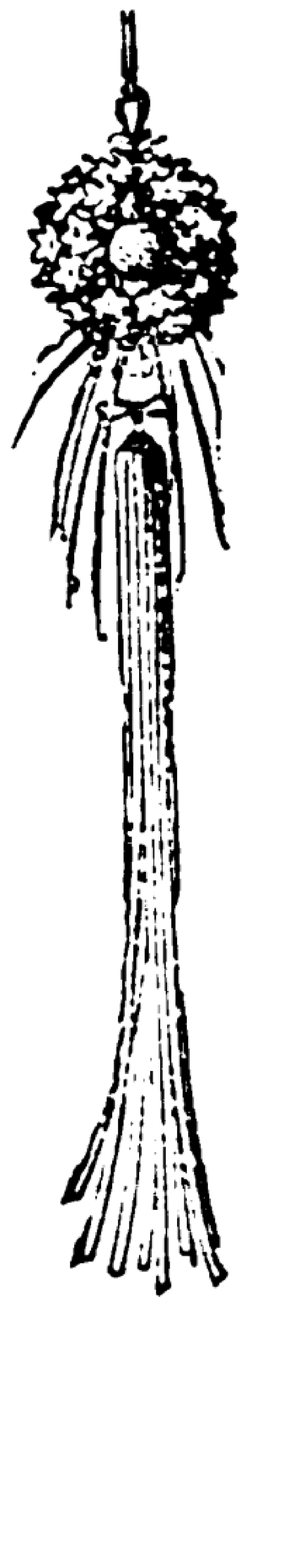
昔京都の或る旅亭に、年若き一士人の宿りけるが、夕飯なども濟み、打くつろげる時、四方山の話出でけるに、同宿しける商人躰の男語るやう『まことや世に祟る神あらば、助くる神もこれあり候。僕曾て大難に逢ひ候ひしに、意外にも助かり候物語、一通り御聞くださるべし。僕先頃用事ありて主人の金二百兩を持ち、遥々旅行致し、驛馬に騎りて金をば鞍に繋けおきたり候ひしが、日暮に金を收むることを忘れて、宿に就き、餘りに疲れしより、其儘に眠り候ひしが、夜半に至り、目覺めて、金の事思ひ出で、大に驚き候得共、すべき樣なく、既に頸を縊りて死なんと致し候。然るところ此時表に

戸をほと／＼と叩く音致し候に付、誰かと思ひ候處、此日僕を乗せ候馬子にて、態々金を持來りくれ申候。僕いたく打喜び、十六兩を出してお禮なりと申して贈り候ひしに、馬子は受けずして、旦那のものを旦那に還すは何の禮にも及ばぬ事に候。併し夜中に此處までまゐり候事故、二百文だけ戴きたきよし申候。強て十六兩を贈らんと申候へば、馬子は、我鄕の中江與右衛門樣、正直に身を持ち君に忠親に孝を致し可申よし敎へられ候。今此金を貰ひ候はゞ、此敎に背く事故、これは貰ひ不申とて、其儘立還り申候。何と今の世には珍らしき事に候はずや』と。

士人は此話を傾聽したりしが、嗟嘆之を久ふしつゝ言ひけるは、『馬子は鄕中のいといやしきものに候を、其廉潔古君子と雖も耻る所なり、敎化のこゝに至るは、中江氏の學德想ひやるべし』と、彼は其翌日直に中江の住みける近江高島郡小川村へと出て立ちぬ。士人を誰とかなす、岡山の熊澤蕃山にして、彼は大に學ばんが爲に京都に來りしも、未だ其師とする所を知らざりしに、此の一話に由て、忽ちに近江聖人中江藤樹のあることを知れりき。蓋し與右衛門は藤樹の通稱なり。

彼は斯くて藤樹に詣り、之に師事せん事を乞ひぬ。藤樹は『我は人の師たる程のものに候はず』とて、強て請へども許さざりしかば、蕃山二日の間其門にたゝずみて去らざりき。藤樹の母之を見兼ねて氣の毒に思ひて、遂に喚び入れ相逢はしめぬ。

彼は遂に藤樹の家に暫く其足を止め、藤樹と同じく我邦陽明學の碩儒として、遂に其濟世の才を成しける。



今宵は鳴らさじ暮の鐘

ロザ、エチ、ソルプ作
山吹女史譯

英吉利國の夕つく日　遙か彼方の山の端を
うすくれなゐにいろどりて　いとしづ／＼と沈みつゝ、
哀れかなしきたそがれに。　名殘の光照りそひて
風に黄金の髪吹ふす　みめ美しき乙女子と、
力なく／＼辿り來ろ　男の額輝きぬ。
男は深きかなしみと　物思ひにうなだれつ。
乙女は胸にやろせなき　憂をいたく忍ばんと、
もだへてかたろ唇の　色さへ白み寒げなり。
さても乙女のかくばかり　思ひ煩ふ事はそも、
『今宵ばかりは鳴りなせそ、入合時の鐘の聲』。
高くそびえし塔の　構の眞壁物すごく、
いと淋しげに見ゆろなろ、　暗き冷き年古りし
獄屋を指してベッシーは、　色あをさめし唇に
口ごもりつゝ云へろやう。　『ヤヨ御寺守聞れかし。

彼處に見ゆろ獄には、　今宵の鐘の音と共に
殺されぬべく定まりし　我が戀人は在すなり。
世に救ふべき道絶えぬ。　クロムウエルも暮までは
必ず來りまさぬべし』。　斯くて乙女の唇は
あやしき迄に白みつゝ、　呼吸もせはしくさゝやくは、
『今宵ばかりは鳴りなせそ、入合時の鐘の聲』。
『ベッシーよ此われは、　幾年月の其間、
日影落ち行く黄昏に、　暗き櫓の下に來て
入合時と人も知ろ。　此鐘打たぬ時やある。
わがつとめなろ事はしも　正しくなせし此務、
縱令節は老ぬとも　いかでうちすてやみぬべき』。
情をしらぬ寺守の　言の葉末のいかばかり
鋭かりけん、宛然に　矢をふくみし箭の如く、
なをあどけなきベッシーが　思ひ亂れし胸板を
あはれやいたく貫きぬ。　翁はさらにいひつぎぬ、
『今宵のみさて鳴らさでや、入合時の鐘の聲』。

やつれ果てたる其顔の　思ひに沈む樣見ゐて、
色あをざめつ目を見張り、　忽ち何か胸の中
きッさ思ひや定めけん。　折しも彼方に聞ゐつる
判官の聲さして、　披露の文の讀まるゝを。
聞き漏さじさベッシーは　呼吸をころして悲みの
涙のみこみゐたりしが、　『入合の鐘鳴らん時、
ベシルアンダーウードこそ　死刑受くべきものなるぞ』。
斯くさ聞くよりいきせかれ、　眼圓らかに輝きて、
いさ凄しくなりにけり。　猶も小聲にさゝやくは、
『今宵ばかりは鳴りなせそ、入合時の鐘の聲』。

朝な夕なに踏みなれし　細徑つたいゆう〳〵さ
去り行く霜見もやらず、　血ばしる眼青き頬、
最さ凄しき姿にて、　乙女はいそぎ走りしも、
土地に踵のつかのまに　寺の戸指して飛入りぬ。
しばしのひまもためらはず　矢たけ心の一すじに、
釣鐘かゝる薄暗き　櫓を指して登り行く。
行くてにかゝる階は　いぶせく塵に埋れて、

螢ばかりの光だに　絶てし闇を辿りつゝ。
猶も色なき唇に　祈りつゞくる言の葉は、
『今宵ばかりは鳴りなせそ、入合時の鐘の聲』。

乙女はつきぬ、頂に。　仰ぎて見れば釣鐘の
身におひかゝる恐ろしさ。　下はあやなき眞の闇、
奈落の底に沈み行く　路もかくやさ思はるれ。
みよ、此時に釣鐘の　内なる舌は揺きつゝ、
これぞ正しく入合の　鐘打出でん時なりき。
此有樣にベッシーは　胸冷ゐいきも止まりつ。
『いかに、讀む人此時に　乙女はかれのなるがまゝ
任せぬべき乎』。『いないかで』。　眼閃き身を飛ばし
鐘の舌にさ取付きぬ。　なをも口には唱へつゝ、
『今宵ばかりは鳴りなせそ、入合時の鐘の聲』。

乙女は高くいさたかく、　遙か見おろす町々は
只一點の火の如く　最さも微けく見ゆるまで。
身は天地のその中に　ゆら〳〵ゆらぐ釣鐘の

かゝれる如く懸りけり。
綱手を引ける寺守は、
老ひしが上に雪の
鐘の音さては聞かざりき。
されど操はうら若き
バシルが死出の旅立に、
わかれのかねを打つことさ
思ふぞ實にも愚なれ。
乙女はかたく取すがり。
さわだつ胸のあら波を
己れと心をしゝづめ、
猶も口には言ひけらく、
『今宵ばかりは鳴りなせそ、入合時の鐘の聲』。

やがて揺ひし釣鐘の
揺かすなるを見るまゝに、
乙女はヒラリと身をかわし
もと來し方へ辿り來つ。
百年以來跡絶にし
いともの古りにし階に、
つまさき固く踏みしめて。
かくなし終へしベッシーの
雄々しき行爲のうるはしさ、
聞く人ごとに讃へらつゝ。
入日の影の輝きて
みそらいろどる其如く
幾世の後に謡はれん。
頭に雪をいただける
齢や高き人々が、
幼な子どもの團居にて、
教へ語らふ折々の
言の葉草は何ならん。
『彼宵ばかり鳴らざりし、入合時の鐘の聲』。

遥かの岡にクロンエル
此方を指していそぎ來る。
ベッシー今はなやみたる
あささへ失せて悦は
頬に溢れてうち笑みつ、
いそ〳〵として立ち迎ふ。
さも嬉しげな笑顔の
いとゞやさしく見ゆれども、
消ねぬ歎きの跡さめて、
やつれ果しぞいたはしゝ。
足元近くすゝみより、
傷み砕けし双の手を
見せてや告ぐる物語。
聞くこと〳〵にいとしさの
情けに堪ずクロンエル、
いとし涙の目を濕りて、
『心安くも行ねかし、
汝が戀人は殺されじ』。
『今宵は鳴らさじ、暮の鐘』。

家　政

二本の林檎（實物教育）

都を程隔たりたる利根川の邊に、豊けき地方紳士ありけり。家には愛らしき二人の男兒ありて、長を達一と呼び、次を二郎と云ひて、父母の愛育一方ならざりき。

父は心得ある人にて、兼て兩兒を愛する中にも、盲愛はせずして、終始兒のためを計りて怠りなかりけるが、達一の生れたる日に、庭の一隅に二本の林檎の樹を植へ、爾來等しく肥料を施し、等しく枝を刈りて、少しの別け隔てなく培養せしかば、達一が十一二才の頃には、木は何れもまけず劣らず、青々と生繁りけり。やがて歳の春は來りしかば、母に伴はれたる女子父に導かれたる男子、各々手に籠を持ち、三々伍々野邊の若草を摘に出て、小川の邊にはふが如く生ひ立ちたる芹、小山の麓に恥しげに頭をのぞけ上げたる土筆など摘みて、各々面白く遊びけり。此の遊び仲間の中に、彼の達一も二郎も交りしが、其父の植へたりし木の幹は、もはや達一の腕より太く、梢は家の屋根より高くなり、白に赤きをこきまぜたる花は、青き木の葉の間より顯はれ、將に開かんとする蕾は、頭を並べて眠るが如く、醉へるが如く、婦人の頭上の簪ならねば、美術館に飾られたる作り花の美しきに似たり。二人の子は歩み〳〵てその樹の下に立ち、聲をそろへてその美しきを賞賛せり。父は喜ばしき顏にて、二人を眺めありしが靜かにその木を指して『此木はお親父さんがお前方に上げようと思ふて、植へたんだが、これからお前方の勤勉の度を試めすために、一本づゝやるから、怠らずに培養してごらん』と云ければ、二人の子は思ひがけなき進物に、驚き喜びて之を受け、日々木の下に行てその成長を待てり。兼て二郎は勤勉なる性なりしかば、心を込めて之を培養し、或は虫を去り、枯枝を除き、根の周圍の地を柔げ、雨水の竄入を助くるなど、注意至らざる所なかりしが、兄はその性質弟



に異り、初め二三日の間は大に喜び、木の下に行きて眺めたりしが、もはや飽きしものとみへ、其後は木の下へは更らに行かず、犬を逐ひ歩き、或は道路の人に石を投げ、時には近村の徒ら者の隊長となりて、鬪爭の眞似をなす等、亂暴止む時なくして、四躰に生傷の絶へ間なかりき。

かゝる間に光陰は過ぎ行き、夏も終りになりけるが、一日二郎は欣然として、手に二ッの籠を持ち、父と共に歸り來れり。中には水の滴る計りの林檎の實の、立つもあり、横たはるもあり、取りたてなる美しさ云はん方もなかりき。達一は己れの木にも、又たかゝる菓のあらんと、喜びて庭に下り行き見れば、豈に計らんや、達一の樹は、葉も所ろ〳〵に着きて、青き色もなく、將さに枯れんとしてありければ、その失望云はん方なく、二郎の木の、青々として、美しき菓の幾十となく成りたるを見くらべて、うらやましくもあり、悲しくもあり、腹たゝしくもあり、涙を浮べて家に歸り、二郎の菓を己れに分たんことを父に求めたり。

父は頭を振りて曰ける樣『イエお前は決して此の林檎を食ふことは出來ない、お前の木と二郎の木は、一處に花を開いたに二郎は能く培養したけれども、お前はなまけたから、遊怠の報を得たんだ、二郎は毎日木の虫を取つたけれども、お前は少しも虫を取らなかつた、二郎は毎日水を灑いだけれど、お前は捨ておいたではないか、勉めたるものゝ報を得るは、我家の規則だ』と、懇々説き聞かせしかば達一は顧りみて一々父の理に伏し、頭を垂れてありしかば、父云ける樣『お前は苗木の畑に行きて、その中よりお前のすきな木を撰んでおいで、凡べて菓は勤勉より來ると云ふことを忘れず、爾後培育を怠たらずして見るがよい』と、かくて達一は、父の畑より柿の木を取り來りて、植けるが、昨年の結果にこりたる達一は、恐れ謹みて朝夕培ひしかば、翌年に至りて、木は林檎に劣らず成ちて、冬の收穫に喜びを得たりと云ふ。

人の一生には、常に二本の林檎は立てり。勤勉なる人は榮へ、然らざる人は不幸を來す、心して幸福の道を

求むべし。小兒の此の道理を知らざるは、父母の敎ざればなり。我等は以上の如き實地につきて敎訓する父母の多からんことを望むの情に堪へず。

小事は大事

人の家に嫁し、新家持の困難と云ふへきもの種々ある中に、己の心得ぬことを知らぬ顏も出來ず、さらばとて之を知りたる顏せんには、間違のあらんことを慮る程、心惡しきものはあらず。時には長く召し使かわるゝ年老ひたる下女等の中には、新入の花嫁を面白半分にいじるものあり、或は花嫁の知らぬを幸ひに、品惡しきものを求めて、高き價を貪るものあり。そを知らずして、姑より誡を受くる等、皆な己れの智識の足らぬより來るくるしみなり。されば日常用ゆる物品の一通りの物を識別し得るために、學校にて學ばざる學問をなさゞるべからず。例へは◎善き米は粒大にして、色半透明に、煑てその量の增すものなること◎善き醬油は、茶碗に入れ、箸等にて泡たゝせんに、泡の枇杷色にして暫らく失せざるものなること◎牛乳の善良なるものは、色白色に、少しく青味を帶び、一滴を爪に滴して、倒まに指を向くるも、點滴の落ちざる事◎水の善惡は硼砂を投入するか若しくはアルコールにて解かしたる石鹼を投入するに、良水はすみ、惡水は濁る事等、何となく家事に必要なる事は、一々心得をかば下女にいじめらるゝ恐もなく、姑に苦めらるゝ憂もなし。之を知るには、人の晝寢をなす暇或は他人の噂をなし、或は他人の衣服を品評し、或はつまらぬ小說を讀む時間に、家政に關する雜誌書物等を讀むべし。一日の中には、ボンヤリとして何もなさぬ時間丈けにても、是等のことを知るに充分なる時間はあるなり。

婦人の容貌には何を記しありや

婦人々相學などゝ云はゞ、可笑しく思はるゝ習はしなれど、去りとて人々の交際する初にあたりて、其人の

容貌風采を見て、其人の性質を判斷することは、少しもあらざるかと云ふに決して然らず。人々は人相學を輕蔑しながらも、實際には人相によりて性質を判斷するを習とす。去れば多くの經驗によりて、人相學を定むることは爲しがたきにもあらざるべし。去れど此に揭ぐるは、多くは不完全なる經驗に出でたるものなれば、之を以て悉く交際する婦人の性質を定めんとするは、嗚呼なる仕業にして、人品の眞價を過つこと少からざるべければ、只だ一塲の戯として見るをよしとす。

第一、一躰の容貌　世人は多く美人なり醜婦なりと輕々しく云へども、醜美の區別は如何にして定むるかと云ふに、容易に分ちがたきが如し。去れば醜美の別はなきやと云ふに、また然らざるもの丶如し。多くの彫刻家、畫家の爲す所を見るに、美人とは丸顏の人に限られ、丸顏の者は愉快にして交りよく、樂しきことを好めども、智力の欠けて、活潑にして心の靜まらざる人を意味するもの丶如く、卵なりの長顏にして、こけたる頰、尖りたる鼻、締りたる口元、尖りたる顋、高くして且つ少しくこけたる額の人は、之に反して神經質にして、心の靜まる暇なき婦人なりと信ぜらる丶もの丶如し。去ども眞正の美人は、何れにもあらずして、此二個の相調和したるものこそ眞正の美人なるが如し。余が此に美人と云ふは、徒らに容貌の醜美を定めんとにはあらず。此かる美人は實に母としては子に愛せられ、明白なる判斷力と親愛の心と相一致し、强固なる性質を有する故なり。此美とは流行の美にはあらずして、深き眞との美、何人も輕んずる能はざる美、母としては愛に富み、家妻としては倦み勞れず、常識に富み、光りかゞやき、人を感化し、愛すべき性質を代表し、年老るれども消へざる美を云ふなり。

第二、前額　一躰の容貌は以上の如しとして、細かに之を云はんには、第一に前額を撿査せざるべからず。額につきて第一に着目すべきは、其廣や否やにあり。髮の結方によりては、額の形はかわれども、よく〳〵注意すれば、知りがたきにあらず、高き廣き額ある婦

人は、其智力の多きと、精細なる神經質なるを示めせども、之と共に少しく心の調子のつりあいを失いたるを示めすものと知るべし。少しく傾斜的なる額は技倆ある婦人なるを語り、若し其の傾斜が眼の上にかゝりて高くあらば、精密なる觀察力あるを示めす。若し眼の上にかゝりて傾斜なるにあらずば、推理力の微弱なるものと知るべし。前額の十二分に張りたる人は、善良なる性質にして、親愛多きを示めす。多くの婦人は一躰に美術的の嗜好あるものなるが故に、其眉毛の上は一躰に肥へたるものなり、故に眉毛の尻の方より、八分か一寸ばかり上の方にて、此肥肉の著しきものあらば、そは音樂の達人たる證據なり。（未完）

近視眼者の心得べき事

近視眼は局所に疼痛を覺えずと雖も、不便、不自由、不幸之より大なるはなく、一度此病に罹らば一生涯眼鏡を外づすこと得ならず、如何なる名醫大家と雖も之を治療し盡すの道を聞かず、我國に於ても年々近視眼鏡を掛けし青年輩續々と增殖するは寧ろ憐むべき現象ならずや、

殊に學生、寫字生、彫刻師の如き細字細物を扱ひ過度に眼力を遣ひ又は「ランプ」の光線刺戟を受け又は眼目の位置を轉逆するが如き眼力使用の不規則より起るものなれば、青年少壯の人は近眼とならぬ前に宜しく注意する所あるべし、芝の眼科專門醫小村格氏の報告に依り左に近視眼者心得を記すべければ、常眼の人と雖も一讀し置かるべし、

一、近視眼者と雖も自身に眼鏡を撰用するは不可なり、醫師の差圖を受くるを宜しとす、

一、近視眼者は常に成べく遠隔の距離に於て諸般の業を執り、たとへ細小の物體と雖も眼より六寸以內にては見ざるを宜しとす、

一、讀書、寫字、裁縫其他諸般の業を營むときは成べく頭部を正直に保ち前方に垂れしめさるを宜しとす、近視を增惡するは頭部を前方に垂

るゝより起るもの多し、

一、讀書の際其頭部の前方に垂るゝを防ぐには書籍と眼を殆ど同等の高さに於て手に保持するか、又は近來坊間に販賣する見臺形に作りたる倚書床を用ゆるか、此邊に能々注意すべし、

一、就業中に時々眼力を休むるを宜しとす、其休止時間は近視の强弱と物體の大小とに由りて一様ならざるも、先づ三十分時毎に五分乃至十分時宛休むるを宜しとす、

一、日光、電燈、瓦斯燈及び石油燈の反射强烈にして視力を疲勞せしめ、又は夕景の闇淡たるが如き光線薄弱にして視力を過働せしむべき塲所に於ては、讀書裁縫の業を營まざるを宜しとす、

一、過暖の室に起臥し、又は狹隘なる室内に雜居するは宜しき事にあらず、殊に毎夜眠に就く時は成るべく枕を高くし、頭部の低下せざるやうにすべし、

一、過劇の運動、詩歌高吟、喫煙過度、强烈の飲料及び飽食等を最も愼むを宜しとす、

一、近視眼者は往々四肢の寒冷を覺ゆる者なれば、冬時は務めて重衣するを宜しとす、又た常に便秘の癖あれば時々相當の下劑を用ゐて可なり、

以上の事項は近視進行の原因となるべき眼内の充血、調節機の緊張及び視軸の輻輳等を避くべき方法なり、而して近視眼が絶えず進行する性質を有するものなれば、若し眼のまばゆくなり又はつかれを覺ゆる時には一切眼睛の使用を廢し、絶えず水にて眼を洗ふか、或は暗室に仰臥するか、兎に角眼の安靜を計らざるべからず、眼は人間の身體に最要最貴なるものなれば、天下の子弟豫め用心して不幸、不自由なる近視眼者と成り玉ふべからず、

春時に葡萄を食ふを得べきや

好き菓物は格別期節の近きものなり、葡萄の時節は已

に來れり。されどその去ることもまた遠からざれば、此の甘味なる菓物を、長く貯ふるの法を知り、時の暇に之を試みば、不時に來客を喜はしめ、家内を樂しむるを得べし。



或人は正月の元日に葡萄を食はんとて、種々の苦心をなしたれども其の効なかりしが、不圖、或る年の正月、物置の隅を見たるに、葡萄が青々として夏の色をかへずにあるを見たり。これは其前年の夏に多くの葡萄を買ひて殘りしものを、翌日食はんとて葡萄の葉にてつゝみて、瓶の中に入れ、密閉しをきたるに心つかずして、半年をすごせしによると云へり。されば此法に從ひ、葡萄の葉にてつゝみをかば、貯へ得べしとも思はる。

今ま一の法は通常、菓子屋にて月の雫と稱するものにて作るなり。これは前年、深川の船橋と云ふ菓子屋にて賣り出せしものにて、其方法は先づ葡萄の實の、よく／＼熟して、更らに疵なきものを撰びて、よく水にて洗ひ、さて白砂糖の極めて善良なるものを火にかけて溶解し、ぐづ／＼と煮へ立たしめ、右の葡萄のヘタを持て、右の煮へたる砂糖の中に入れ、砂糖のツきたる時に之を引きあげて、日光に乾せば、砂糖は固まりて、葡萄の周圍を取卷く衣となるべし。之を栗粒の中に埋めて、用ゆる時まで保護すべし。翌年の六月頃までは保存し得べし。其味の美なること筆紙の盡す所にあらず。

今一の法はジエレーとして保存するなり。ジエレーやジヤムのことは、度々家庭雜誌に記したれども、葡萄のジエレーは少しく之に異なる法を用ゆべし。先づ葡萄の實を取り、よく洗ひザルの如きものに入れて水を切り、後之を瓶の中に入れ、つぶして皮の離るゝをまち(此間二日位ありてもよし)之に熱湯をつぎて、かきまわして保存するなり。是は最も固有の味を損せざる法なれども、永續しがたし。永續せしめんには、矢張、

前々號より記せし通り、常のジャムの如く、砂糖を加へて煮るの外なかるべし。

料理の心得

(一)加減

料理を爲に當り、第一に心得べきは加減なり。甘きを好む人あり。辛きを嗜く人あり。百人百色にて、各々の口に適する樣に料理せんには、とてもむつかし。されど鰹のだし、昆布のだし、しいたけの出し等、出しの加減を尤も叮嚀になしおけば、たとへ客の口には種々なるも、加減によりて萬人の口に適ふなり。次に心得べきは取合せ、盛方なり。

(二)取合盛方

取合は色取を第一とし、野菜の青きものあれば、卵の黄味あり、胡蘿蔔赤茄子の赤きあれば、百合豆腐の白きあり、或は鮪のさしみこちのあらひをつけ合す等の心付を專一とす。盛方は一口茄子の丸形には、うどんの長み、とうふの四角には、てんかんの三角なるもあり、薄身、厚身、樣々の盛合せを注意すべし。何程に佳品美味の馳走なりとも、取合盛方の善良ならざる時は不馳走となるに至るべし。

(三)煮方盛方

次は盛方に四季の別なかるべからず。例へば春冬は盛方をふつさりと、賑かに、見ゆる樣に注意し夏秋は盛方を淸冷なる樣に心得べし。煮方加減は云ふまでもなく、夏は冷やかなる物、さつぱりとしたるもの等を多く、冬は之に反すべし。されど夏なりとて、熱きものは尤も熱きをよしとす。潮煮の冷きか如きは、實に不味極ればなり。

(四)器物の注意

膳椀の拭き方に注意すへきは云ふまでもなけれども、上手なる料理人は、常に箸に心を付くると云ふ。箸の色黒きもの、或は黴の生じたるものは、尤も忌むべきなり。

(五)料理の秘訣

料理の秘訣とも云ふべきは、飯のことなり。已に人々の經驗もあらんが、何ほどの馳走たりとも、飯の加減あしきときは、凡べての心盡くしも無になるべし。別けて冬の日には、熱飯は第一の馳走なり。たとひ三汁十一菜の饗應なりとも、第一飯、第二本汁、第三平皿、此三種には別して心を用ゆべし。この三種宜ければ他の料理は、自づから美味となるを覺ゆ。その外料理をなさん人は、氣てんのきくを以て第一と心得へし。

○小倉蓮

蓮は茹付けて食するを通常の料理とすれど、此に通常知られず、美味なる一法あり。是は蓮を生にておろし、うどん粉及び湯出たる小豆と混ぜ、砂糖塩を少しく加へて、棹形、若しくは丸く、好みの形になし、釜の湯氣にてむすなり。之は茶碗、菓子碗のぐにもなり、通常の食用にもなるなり。

○寄せくわい

寄せくわいは、一種の和洋折中料理にして、日本料理ならば、茶わんの種子となり、西洋料理ならば乳をかけて、用ゆるを得べし。慈姑は好き惡らいの人まゝあれど、この料理法に從ひば、平常きらいの人も、爭ふて皿を傾くるに至る。その製方は先つ慈姑を能く洗ひ、皮を剝きてわさびおろしにておろし、魚のすり身、鷄卵、若しくは牛肉のたゝき身、何にても入れ、最後に葛粉を適宜に入れ、塩砂糖にて加減して、好むが如き形になして、釜の湯の煮立ちたる所にてむすべし。西洋料理には、乳をかけ胡椒をそへて出すべし。

○結び長芋

汁の身、若しくは茶碗菓子碗に用ゆる長いもは、細き長いもの皮を取り、一日計り塩水に入れをくべし。彈力出きて、如何に曲け結ぶも、折れざるに至る、かくて結びたる後、直ちに眞水にひたせば、元の如く堅くなるなり。

○山ぶきとうふ

何時も變らぬ豆腐の味と云ひ來れども、豆腐も料理により、魚にも勝り、牛肉にも優る、美味となるべし。山吹どうふはその一法なり。即ちとうふを花形、若し

くは角等に切りて、串にさし、卵の黄味に醤油と砂糖を混ぜしものをつけつゝ焼なり。色は山吹の如く、味は蒲焼にも似て、美味云はん方なし。

○志め豆腐

志めどうふを作らんには、とうふを通常の菓子大に切り、各〻紙につゝみ、一々火鉢の灰の中へ入れをくべし。此くすれば、水分、灰に引かれて去り。殘る所は眞の豆腐となるべし。之は多くは坪皿の中に慈姑白糸芋(芋と白糸の如く切る)等と合せて、白あづきのいとこにとして、用ゆ、精進料理として賞美せらる。



手藝案内

洗濯法三件

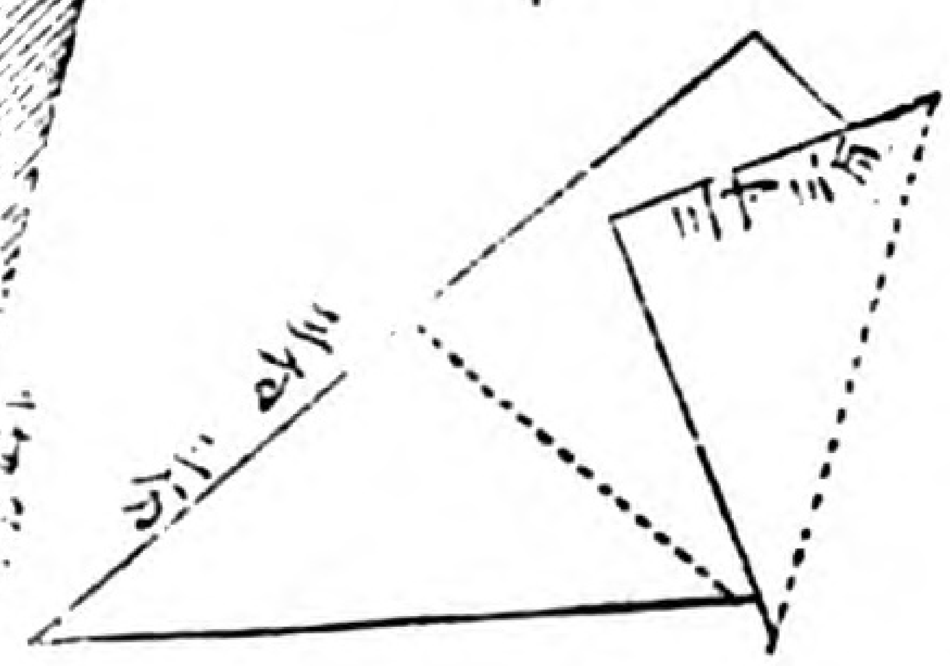
詳細の事は已に記載したれども本年も早や向寒に向ひ洗濯の期も過ぎ去るべければ成るべく今の中に是迄の汚穢物は洗濯し置くが肝要なり、夏は何物も汚れ易きものなるが、其中諸君が此夏の始に求め玉ひし純白の麥藁帽子も多少黄土色を帶ぶに至りしなるべし、之を洗濯するには「レモン」の切口を以て能く擦り其汁を洗ひ落したる後、アラビヤ護謨を引けば元の如く白く且つ堅くなり、毛氈等の洗濯法は牛の膽汁を温湯に少量加えて能く〳〵洗ひ落し、而して膽汁の臭を去るには、洗ひ上げたる毛氈を大氣に曝し置く、色染木綿を洗濯するには、青色又は赤色等には、石鹼水に「レモン」水又は綠礬油水を加へて洗ひ、濯ぐべし

梅と桔梗の涎懸

梅か桔梗の涎懸を製して可憐なる一つ二つの嬰兒の首の邊に着けんと欲する人は大概左の寸法に依れば間違

なかるべし、先づ八寸四方の紙を角より角に斜に半折し甲圖の如く點線の處より三折せば乙圖を得るなり、此乙圖の斜線の處を裁ち去らば正しき梅鉢を得此の如き模型を製し置き五個の瓣を片々に裁ち去り、製すべき布帛に其寸法にて切り裁ち、一方を明けて悉く五個を縫ひ合はせ、（五個の瓣は一々異種なるを擇めば甚だ美麗なり）綿心を入れたる丸紐（長二尺八寸巾二寸）を着くれば丙圖の如き涎懸を製し得らるゝなり、而してこれに反照の能き裏地を附するを要す、其他桔梗の

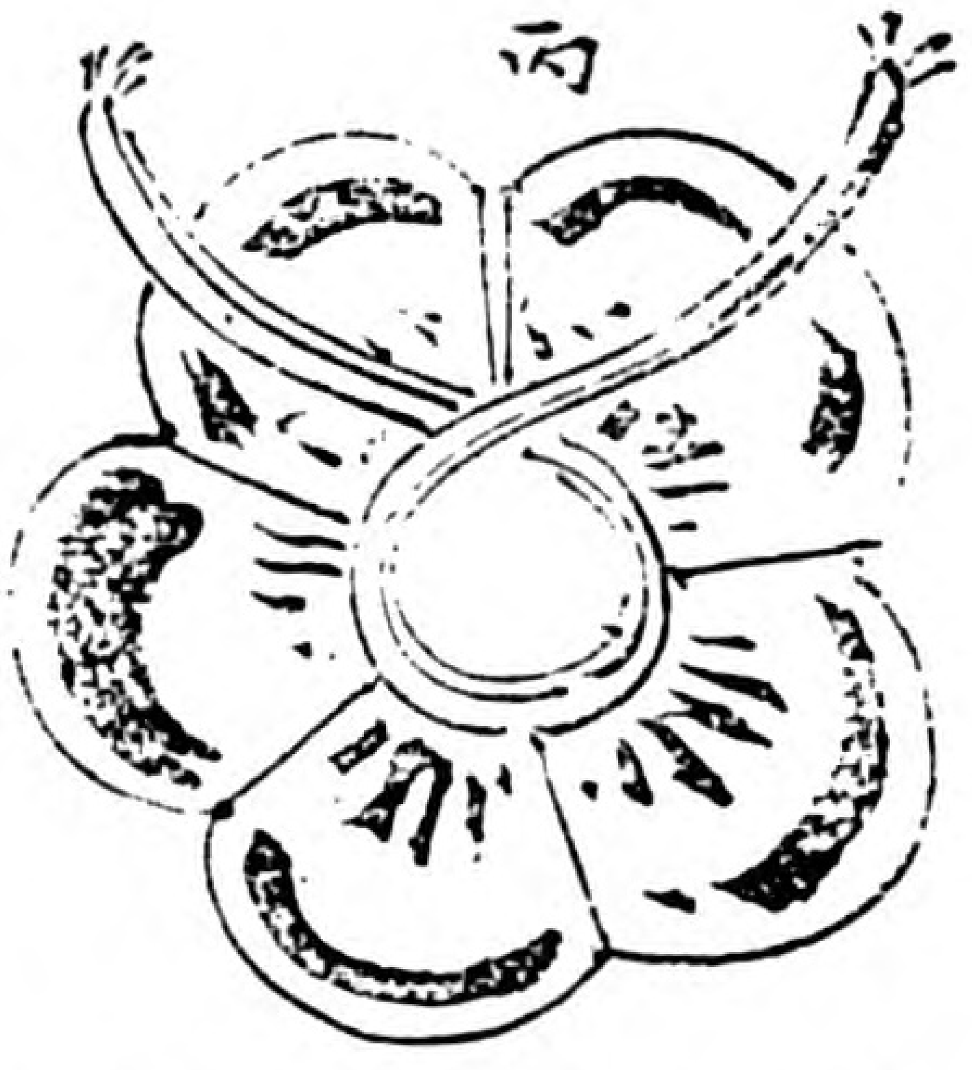
甲



乙



丙



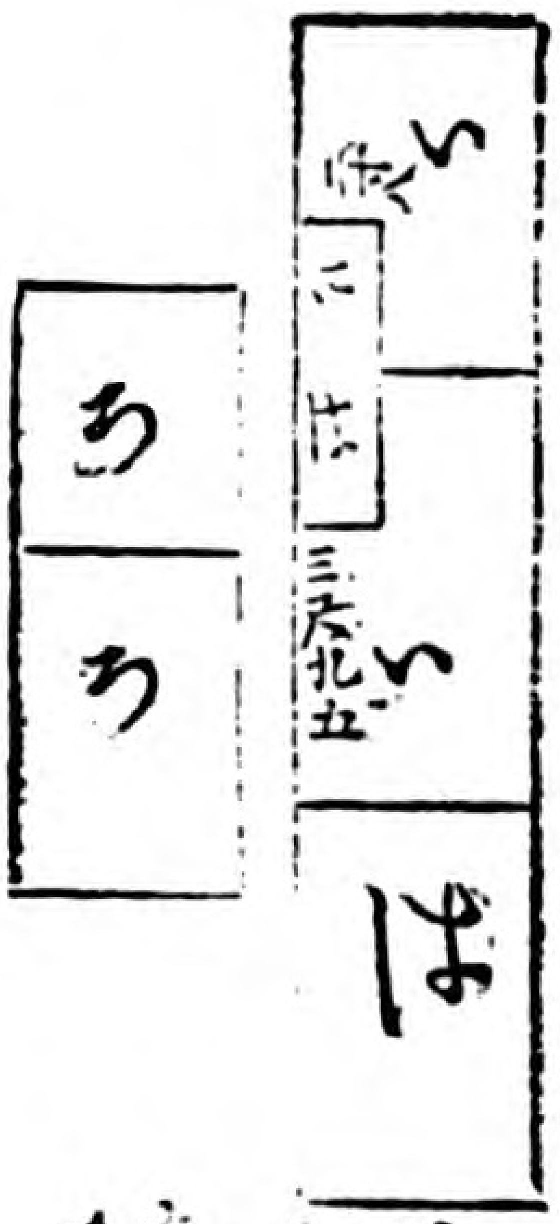
涎懸に於ても櫻、五つがたばみに於ても裁縫の法は變らず、當今は何事も毛絲流行なれども、上等なる縮緬類を以て右の如き涎懸を製せば隨分雅美なるものなり、



桔梗裁方

男羽織裁方の三法

今や秋冷稍酣となりければ袷羽織の入用となりぬ、今男羽織裁方の三法を記せば先づ其普通の裁方則ち巾九寸五分長二丈八尺の布を以て一枚の男羽織を得んと欲せば（い）は身ごろ各八尺宛（ろ）は袖各三尺九寸（は）襟六尺

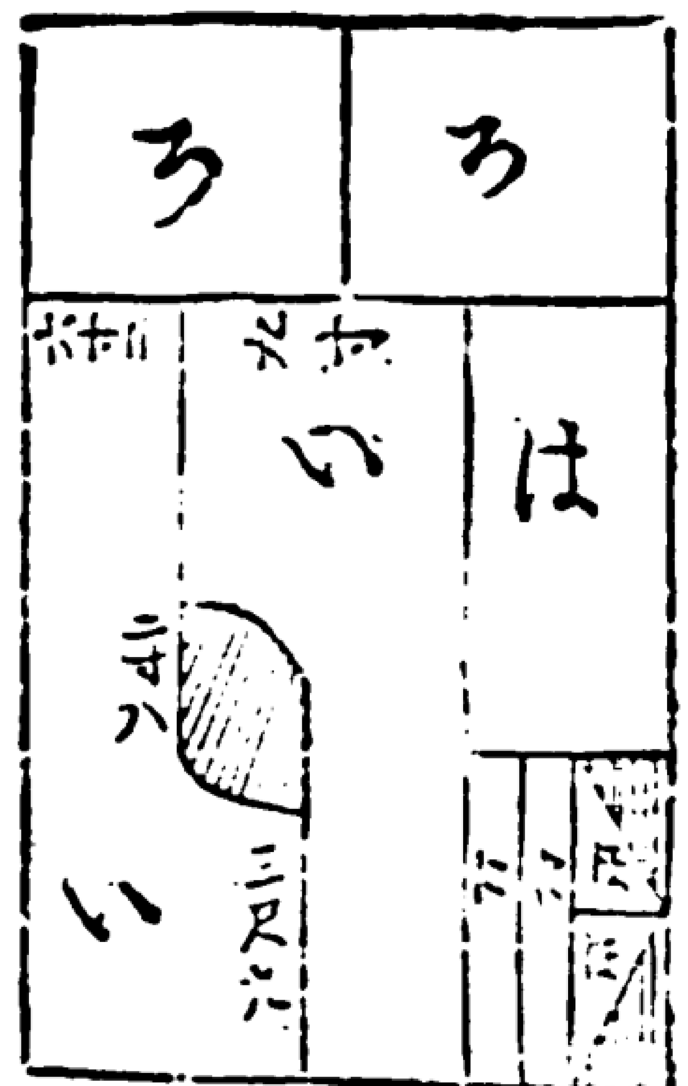


普通裁方

（に）と（は）は袖口と「まち」を取るなり、

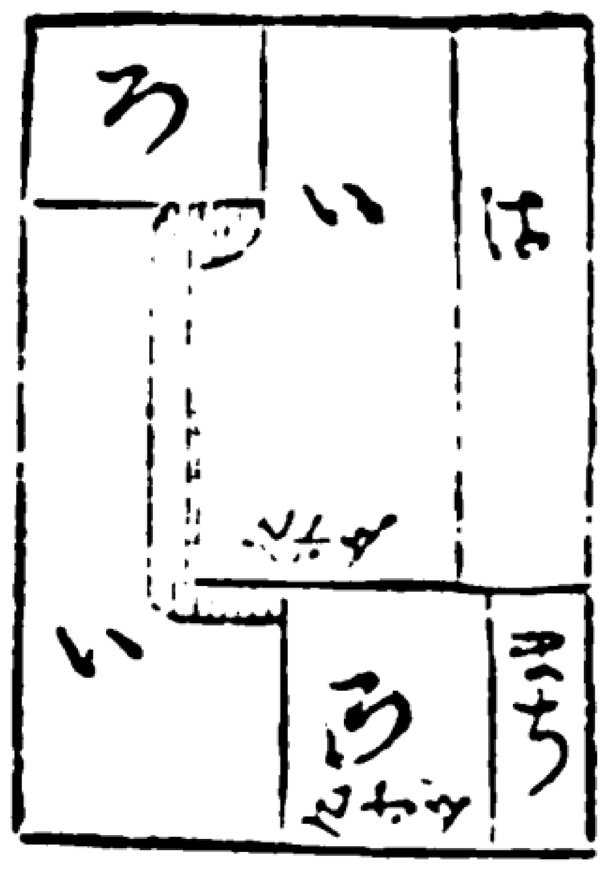
二尺巾一丈一尺の布を以て裁つ時は

(い)は身ごろ(ろ)は袖各二尺九寸(は)は襟六尺(に)は袖口(ほ)は「まち」と知るべし



二尺巾裁方

若し二尺巾紋織(片面物)にて男羽織を製せんとならば左の如し、



紋織裁方

(い)は身ごろ各五尺八寸五分(ろ)は袖各二尺九寸(は)は襟六尺なりかくして裁縫し得たる羽織は丈二尺五寸袖一尺四寸五分、これ普通六八の羽織也、



社交一斑

西洋禮式一斑（つゞき）

YH子

禮服

禮服の概略を記さん、

現今日本に行はるゝ男子禮服は左の如し、

大禮服――帽も、上衣も、下衣も袴も金色燦爛なる金モール附、シャツは白色、襟は立襟又は折襟、襟飾は白色の紐又は蝶方に限り、沓は黒のゴム引、外套は適宜に任す、手袋は光澤の皮製を用ふ、

通常禮服又は燕尾服――絹帽(屈伸自在なるものにして晩餐會又は夜會等に携ふ)にして上衣は無地の黒羅紗、胸部の釦は雙行に限り、下衣は同じく黒羅紗、胸部の釦は單行、袴も無地の黒羅紗に限る、鷄衿は白色襟も白に限れども其形に至りては隨意なり、襟飾も白色の紐又は蝶形なれど地質は適宜なり、沓は黒のゴム引、外套は大禮服と同じく適宜に任じて可なり、手袋は光澤ある白色の皮製を用うれども淡鼠色を着用するも妨なし、

「フロック、コート」――帽は燕尾服に同じく絹帽なり、上衣は無地の黒を可とすれども黒紺又は綾織を用うるも隨意なり、下衣は上衣に準

すれども胸部の釦は單行雙行孰れを用ふるも妨なし、袴は無地の黑羅紗又は餘り目立たざる縞地を用ふべし、シヤツもカラも無論白色、其製は適宜に任す、襟飾は大禮服又は通常禮服と違ひ黑色を用ふるも妨なし、沓は通常黑皮を用ゐ、外套は適宜、手套は白色を除くの外各色を用ゐて妨なし、

禮服着用の注意——上衣胸部の「ボタン」は凡て懸るを正式とす、室内に入る時は屈伸自在なる高帽を壓搾せる儘にて携ふべし、夏季は上衣下衣及袴等無地黑の西羅紗を用ゐて苦しからず、下衣に限り白色の「リンネル」を用ふるも妨なし、襟飾は白色に限ると雖も男子のみ參集の時は黑色を用ふる事あり、白色の手袋は成るべく淸潔なるを要す、手袋は兩手に穿つか又は右手のみ脫するとも左の手袋は脫せざるを通則とす、喪に臨み或は葬式に會するには上下無地の黑服を着し、襟飾、手袋等凡て黑色を要す、又は上衣及び袴は無地黑の西羅紗或は綾織又は無地黑の「アルパカ」を用ゐ、下衣は白の「リンネル」を用ゆ、炎暑の候には下衣及袴は白の「リンネル」を用ゆることもありと知るべし、

女子の服制は明治十七年十一月十五日宮内省の内達に依れば本制は日本的なれども（大禮服、通常禮服、通常服に分つ、西洋禮式の範圍に屬せざればワザト記さず）英語にて「コートツレス、ウヰズツレエン」の禮服を用ゐて妨なしと聞けり、

さて是より衣服につき聊かいふべき事あり、衣服に於て最も緊要とする所は着用する人と着服の染色との調和なり、男子に於ては黑が最も適應したる色彩なりとは歐米一般の輿論なり、然れども婦人に至りては彼の白皙人種の内に二種の容貌區別あり、一は頭髮光澤ありて容色美艷にして微紅を帶ぶるものを「ブロンド」（樺色）と言ひ、一を頭髮黑くして皮膚淺黑を帶ぶるものを「ブルネット」（茶黑色）といふ、是等の中にも數種ありて各樣の顏貌に隨ひ之に適應したる色彩なかるべからず、次に

種々なる衣服の色彩——樺色と藍とを交ねたる紺色は、頭髮光澤ありて顏色紅を帶ぶるものに宜しく、面色深紅なるものには濃き藍や綠も可なり、灰色、黑鳶色、鹿の子石色の如きも好し、蒼白なる顏には暗綠と赤の交りたる色彩は甚だ美觀を呈し、黃色者には黃色の反映に依て美麗を加ね、殊に罌粟色甚だ佳なり、赤と黃色の容貌あるものには藍や橙色や蜜にもよし、藍色なる人には藍色、赤には赤、黑には黑白色の反映によりて却つて美觀を爲すものなり、

帽子と髮との色彩——婦人の帽子に三別あり、第一を「シツプ」（大禮服に用ゆ）第二を「ボンネット」第三を「ハット」といふ、第二第三は婦人通常の帽子にして、帽子の色彩如何に依りて粉裝の上に大なる美觀を添ゆるものなり、赤色の婦人には黑色の帽子に白き石竹色や紅花と白羽とを附けたるものを宜しとし、黑髮の婦人には白赤橙色や黃色を以て飾りたる帽子、「ブロンド」には紫色の花を以て飾る帽子、「ブルネット」には赤色石竹色橙色及黃色を加へたる帽子、光澤ある毛髮の人には白花もて飾られたる淺藍色の帽子配合好し、

衣服色彩の反射——赤色の衣服は冬日に宜しく綠色は晩夏秋日、白色は夏季、黒と濃暗色とは春夏秋冬の差別なし、又色彩によりて晝夜其色を異にするものあり、日中美麗の觀を爲すものも夜間瓦斯燈の光に逢ひて其美を減し、夜間は佳美の色彩も日中には褪色す、即ち深紅色と白色と黄色とは夜間に美を增し、淺黄色は日中美なるも夜間瓦斯の燈光を受くれば土色となり、又樺色橙色は日中に宜しけれども夜間は適せず、又他物の映照に由て適合する色彩あり、衣裳の二種以上異樣の色は其數々の交雜によりて美觀を呈す、又此理によりて却つて自他の美を奪はるゝことあり、即ち藍色の衣裳を着けたる婦人は深紅色の肩掛を用ふれば大に其色彩を損し又黄白色の衣服に濃紫色を以て飾る時は亦大に其美を失ふ、衣服に心を用ゐる婦人は須く此邊に心を注ぐべし、

次號には婦人普通の粉黛、注と粉黛に用ゆる種々の品具を記すべし、

流行の栞

春夢

秋の衣

龍田姫は秋の野を錦に織り始めぬ、さて花の都の人の衣は如何に織り爲さるゝか、

先づ昨今の呉服市場の光狀を記せば、此道の機屋は目下の商勢を察して多くの織出を控ゆる樣なるに問屋は進んで買取らん勢なれど在品少額なるが爲に呉服の直段も上向きとなりぬ、而して府下各呉服屋は衣更に忙しき都の人を相手に商賣繁昌、品少數にして直段割高なるに係はらず、孰れも賣口能く見受けらる、呉服物相場は原料生絲が一時輸出盛にして内地に生絲の缺乏を告げたりければ勢ひ一割以上三割迄の騰貴を見るに至りぬ、今其騰貴割合を類別せば、縮緬類に於て二割五分より三割、お召縮緬は一割、一樂絲織類は七分甲斐絹は一割、伊勢崎銘線は一割、白七子及男羽織染地は七分の騰貴なり、西陣婦人帶地は品多數の爲に變動なし、其他の呉服物も、

今茲に流行しつゝ且つ流行の大傾向ある男女の衣服を紹介すべし、但し衣服購求者の便利の爲に一揃の品鑑と直段とを告ぐべし、これは府下に於て最も確實の呉服店白木屋より得たれば呉服直段は同店に於て賣出す價と毫も差違あることなし、

婦人物（袷）

上等——上着を雙小紋お召又は光輝絲織の珍柄、下着を一樂風通織裾廻に鳩羽色若しくは利休鼠の縮緬を用ゐる風俗、何等の風雅何等の優美（代價三十圓より三十五圓）、

中等——お召小紋縮緬若しくは淡色糸織の上着に更紗縮緬の胴拔を合せて、裾廻に花色若しくは中花絹を用ゐば美風此上なし（代價十七圓より二十圓）

並等——に至りては山糸織若しくば銘線の淡色に限る下着は記さず(代價は直段表を參照あるべし)、

男　物(袷)

上等——上着は淡色の萬筋微塵の諸糸或は一樂にして下着は市樂風通織又は糸織緊絲の淡色子持筋最も流行、裏地、中花色絹にすれば更に申分なし(代價二十五圓より三十圓)、

今一個の上等品を記せば上着を紺地鼠微塵萬筋緊絲又は大名縞の大島紬とし、五に十の字絣或は花絣の本場琉球を下着に合すれば格好最美、少しく意氣なる風俗なり、勿論裏地は淡花絹と知るべし(代價二十三圓より二十六圓)、

中等——糸織の上着に八丈の變色を下着にし、裏は花色絹を附くべし、今一個を擧ぐれば結城紬の上着に米澤流球の珍柄を合はす、これは額裏即ち胴を花色絹にして裾廻を羽二重金巾若しくはキラコを用ふ(代價拾壹圓前後)、

並等——上着は銘線、秩父縞の中にて撰み、或は節絲にても可、次は瓦斯双子の上等若しくは瓦斯結城瓦斯市樂最も流行、而して此瓦斯糸織は今春の本紙上に記載したるが如く頗る珍奇の柄を續々織出し、其光澤と言ひ品質といひ兩ながら佳美にして一見本絲織と殆ど差違あることなし、かゝりければ需用者日々増加す、これを平民的流行の最たるものとやいはまし、

羽織と帶(男女)

女向羽織は今春の紙上に豫言したるが如く黒縮緬の五紋送に流行の中心點となりにけり、其紋大は曲尺九分より一寸の方に最も好尚多し、而して昨今の時季には小紋縮緬の三紋流行す、さて織物に至りてはお召小紋織八端の類にして、如何なる前兆にや男物同樣の品柄も用ゐるに至りぬ、さて男物に移れば黒七子八分の流行、次に市樂或は羽二重、色は無論黒にして紋は五所三分三所七分の傾向なり、而して紋の大は漸次大を尚ぶに至り、昨今にては曲尺一寸一分より一寸三分最も多く見受けらる、次に織物に至りては市樂織、諸絲織、緊絲織類最も需用者多し、商人又は中等人士の平常羽織には結城紬の表に紺甲斐絹の裏を附して可なり、

羽織の裏地は婦人物に於ては緞子、紋塩瀬、紋壁チヨロ、色綸子にして甲斐絹は其以下に用ゐる品なり、男子には緞子、更紗七子又は甲斐絹無地を多く用ゐるなり、

帶の流行は婦人向には繻珍織、其流行柄合は黒地、鐵色、藍革、利久等の友禪樣とす、唐繻子及黑の小柳に至りては相變らず行はる、更に腹合帶に至りては片側を唐繻子黒の小柳にして之に繻珍及疋田織を合はせたるもの非常の流行、

男子物に至りては繻珍大に流行、次に獻上紋織の類にして凡て華美なる品柄追々流行の傾向となりぬ、

左に目下流行衣服の品名と直段とを擧げて、衣服購求者の便とす、

京お召	自七圓五十錢至九圓
お召紋織	自十一圓五十錢至十二圓五十錢
光輝織	自十二圓至十三圓
市樂織	自九圓五十錢至十三圓
諸糸織	自十圓至十七圓
製糸織	自六圓五十錢至十圓
糸織	自六圓半至九圓
山糸織	自四圓半至五圓半
節糸織	同前
銘撰織	自三圓至四圓半
秩父織	自二圓五十錢至三圓
瓦斯糸類	自一圓三十錢至二圓半
黒七子	自六圓半至九圓
黒市樂	自七圓五十錢至十二圓
黒羽二重	自五圓五十錢至八圓
黒奉書	自四圓至五圓
小紋縮緬	自六圓半至八圓
黒縮緬	自八圓至十圓
更紗縮緬	自六圓半至八圓
幽禪縮緬	自六圓半至九圓
白縮緬	自六圓至十二圓
同六丈物	自十五圓至二十圓
同九丈物	自二十五圓至三十五圓
同中巾(六丈物)	自十八圓至二十五圓
白七子	自五圓至八圓
同上等	自十圓至十五圓
白市樂	自七圓至十二圓
花色絹	自五圓至七圓半
同秩父	自四圓至六圓
中花絹	自五圓至六圓半
淡花絹	同前
本紅絹	自四圓至六圓
紅秩父	自三圓半至五圓
繻珍廣帶	自七圓至十五圓
同上等	自十八圓至三十圓
同最上等	自三十五圓至七十圓
同九寸	自三圓半至五圓
黒唐繻子九寸	自三圓八十錢至五圓半
同丸帶	自八圓至十二圓
黒小柳九寸	自二圓半至三圓半
同　丸帶	自七圓至十一圓

縮緬男帶	自六圓半至八圓
博多男帶	自二圓半至五圓
同上等	自六圓至十圓
胴裏地緞子	自二圓八十錢至三圓半
同藍精	自三圓至五圓
同壁チヨロ	自二圓半至三圓
同綸子	自二圓至二圓半
同甲斐絹	自一圓至二圓
羽二重金巾	自三十五錢至七十五錢
同上等	自八十五錢至一圓十五錢

此外は今春さ敢て異動なし故にワザさ記せず、

ランプの笠



竹細工に紙張も「ガラス」製も多く風流ならず、然らばさ問はゞ岐阜製の「ランプ」の笠さ答ふべし、开は圖に依て示さろゝが如く、細骨を以て常盤笠の如く製作し、薄紙を黏して淡泊なる花鳥風月を抹し、瑠璃の瓔珞を附するも亦可憐ならずや、枕頭秋の長夜の友さして親むべし、代價五錢より十錢の間にて購ひ得らる、

延命ぶくろ

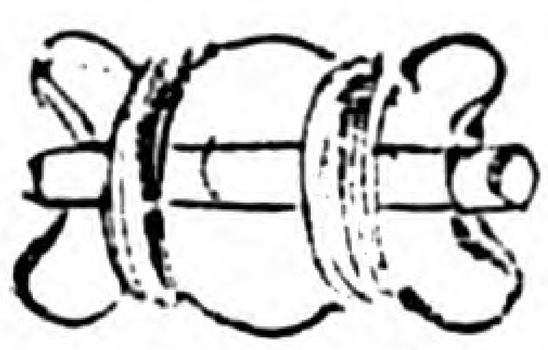


延命ふくろ

是迄は巾着なりしか此頃は絹をもて「メリヤス」編にしたるものなり、色は淡紫淡鼠を尙ぶ、詳細は繪様に譲りて多く說かず、

糸巻

いろ〳〵なる糸巻流行する中にも、圖の如き糸巻も其一種なり、金や銀にて製りたるものは華族の令孃達が遊戯半分の針仕事に用ゐられ、ブリキ製は暗澹の下賤女の手に觸れて糊口の用具さなる、軸は空管を爲して開塞し得て針を藏め置くに便なり、



糸　巻

ハンケチ

麻は最上最流行なれご近來西陣織にて「ハンケチ」巾に製したるもの行はる、單に絹「ハンケチ」は餘り紳士淑女の手に觸れず、木綿物に至りては一枚七八錢の處行はれ、「キヤラコ」製は種々なる品様を出して廉價(一枚四五錢)に賣捌くも未だ流行の域には登らず、

日用品物價

◎米（圓に付）　●一等白米九升一合●二等白米九升三合●三等九升六合●四等白米一斗〇一合●五等白米一斗〇五合

◎雜穀　●新本質大麥三斗三升●新脇場大麥三斗四升五合●新課麥二斗三升三合●相州小麥一斗八升八合●船橋小麥一斗九升二合●上州小麥一斗九升●同常州小麥一斗九升三合●下總小麥一斗九升三合●千葉小麥一斗九升五合●札入竹林麥一七三並一八八●上割麥一七三並一八八●新吉原大豆一斗六升●常州小川小豆一斗四升三合●本場平豆一斗四升八合●新川越豌豆一斗六升三合●鍋隱元豆一斗六升●新肥後小麥一斗八升八合

◎種油　●胡麻十圓三十錢●地水八圓六十錢●荏油十五圓五十錢●井桁一九圓二十八錢久ト九圓二十六錢●一川九圓二十五錢イ九圓二十錢●桐七圓三十錢●ホーキ一圓六十八錢五厘●チヤスタ上錨一圓六十九錢●上月一圓六十五錢五厘

◎砂糖　●稀車匁三十二匁八分●同次三十二匁四分●無類台安十八匁●同次十七匁●呂宗廿匁五分片段々十七匁五分●無類黑十九匁稀十匁●讃州初雪卅分●天光二十九匁

◎鹽　●赤穗三俵七分五厘●大鹽井八家三俵八分●本齋五俵七分五厘●新齋六俵一分

雜録

遺珠類々

貪る可き寶　セ子カ

人の宜しく貪る可き寶は唯光陰のみ

貞操　コレリッサ

心惡き男子も或はすぐれたる智識によりて救はれたることあり然れども貞操の破れ果てたる婦人は終に救ふ可からず

花　ビーチャル

花は上帝の造りて靈魂を入ることを忘れ玉へる最も愛らしきものなり

談叢

山路の雪

皎々たる雪の女王は、たとへ其膚の透き徹りて見ゆるにもせよ、たとへ其手の刺すが如くに冷やかなるにもせよ、世に彼女程妙なるものはあらざるべし、又彼女程氣高きものはあらざるべし。

實に彼女は凄きまでに氣高きなり。怖氣立つまでに潔きなり。然れどもいたはしき彼女は夕をも待たで消え失せざるべからざるまでに薄命なり。

かの北方寒冽の野に住む手弱き露國虛無黨の婦人が、

屢〻恐ろしき大膽なる企をなして、而して其身の朝の雪と共に消ゆるをものゝかずともせざるもの、其行は固より學ぶべきにあらざれども、凛乎たる其志氣は自ら懦夫をして起たしめんとす。彼女等は或る意味に於ては、雪の女王に似たる所ありと謂ふべし。而して我が封建時代の婦人亦往々にして然りき。

戰國の頃は言ふまでもなし、江戸の昇平二百年を經、上下熈々として遊樂にのみこれ耽りし文政天保の頃にさへ、屢〻世に女丈夫は歌はれける。

みすゞ刈る信濃の國飯田矦堀大和守は、當時江戸政府の若年寄となり、大御所文恭公の覺え淺からず、一時は世にも時めきしが、命運は糾へる繩の如く、其時めける因縁よりして、彼が家庭は由々しき事こそ出て來にき。

文恭公の大奥に仕へ、老女を務めけるものありしが、彼女の姉妹に大和守の妾となりて豊浦といへるものあり、彼女は慧敏なる才情と花の如き顔貌とを有し、可憐なる歌を詠み、にほやかなる筆を運ばし、以て大和守の寵を專らにしぬ。

彼女の姉妹なる前の彼女は、彼女の爲めに屢〻贊辭を添へて大和守を文恭公に告げたり。是の故に彼は一時權勢を得て揚々たりき。

懶惰なる大和守は、慧敏にして何事も立ろに辨ずべき其愛するものに自家の爲すべき事をも爲さしめぬ。

彼女は遂に彼が家庭の女王となれり、既にして彼が國の女王となれり。彼が國の總理大臣以下は皆彼女の號令の下に趨らざるべからざりき。而して彼女の號令は必ずしも正しきものゝみにはあらざりける。

是に於て乎一藩の憎惡は、凸面鏡に由て屈折せる光線の如くに、彼女を燒點として集り來れり。彼女の前に於て彼女の爲に贊美歌を歌ふ口は、一齊に彼女の後に於て彼女を呪へり。

一日大和守が得意なる江戸の邸に、國家老安富主計は彼自身を見出しぬ。
傲慢なる殿は奥の褥に坐せり。妖艶なる婦人は其傍に侍せり。而して堅くろしき國家老は其前に召され、大なる好意を以て酒を與へられたり。然れども彼は此時何人と雖其主公の前に於ては爲さゞるべからざるの禮儀たる拜謝の式を行はざりき。
飯田藩の女王は、彼がにがりきつたる面を熟視し、乃ち懷紙をとり出でゝ歌一首を詠じ、以て之を彼に贈りけるに、無禮なる彼は之を一瞥したるのみ、何の言ふ所もあらずして、紙を自家の懷より取り出で、而して女王の歌を併せて鼻をかみ棄てぬ。
主公の色は變れり。滿面朱を濺ぎて居丈高になれり。
而して叫べり、『吾が前に於て猶此くの如し、飯田に於ける汝が專横知るべきのみ』と。
彼は唯低頭平身して恐れ入りぬ。

宴畢るや彼は引きとめて『御意を得たき事あり』と其主公に云へり。
彼が言は極めて力ありき。彼が坐樣は頗るあらたまりき。彼が眸子は一定の所に固着して動かざりき。
曰く、『今臣遠く來て御家中の狀を察するに、人皆豐浦が振舞を憤るものゝ如し。臣つとめて之を安撫すると雖も、彼等は毫も聽くべくはあらず。此くの如くして置きなば事將に測られざらんとするなり。君願くは豐浦を退けよ、然らざれば臣は今君の前を退かじ』。
彼が主公は幾度かいひ爭ひし後、遂に其言葉を和げて之を容れぬ。是に於て美はしき女王は退出され、彼は抃舞しつゝ其國に歸り去りしが、何事ぞ忽ちに其職を奪はれける。
然るに斯く女王の歷史が其一段落を告ぐるに及びて、政府の若年寄たる彼が權勢の歷史も同じく其一段落を告ぐべき時來りぬ。蓋し彼は女王の姉妹の彼を文恭公

に賛美するの故に由て彼が權勢の光りを保ちしものなれば、彼はまた女王の姉妹が彼を文恭公に誘るの故に由て彼が權勢を失はんとするを奈何ともする能はざりき。

是に於て、彼が權勢を思ふの念は遂に彼が女王を思ふの念と相聯合するに至りぬ。而して彼等は再び彼女を彼が傍らに喚ひかへすべく彼に勧めぬ。

彼は將に頷かんとせり、遂に頷けり。

其後、人は彼が傍には若山と稱する一婦人の常に彼に侍するを見き。

彼が權勢の歴史は更に繼續せられたり。彼が家の女王は、昔日と異りたる名と、昔日に異りたる謹愼とを以て、再び彼が家に住せり。

而して彼女の謹愼は大に彼女の美を增しぬ。又大に主公の憐を買ひぬ。

彼は斯くて其職務として政府の爲に天下に號令すべき文書をも、彼女の繊手を倩て書かしむるに至りき。而して未だ半歳ならざるに、彼女は早く已に曩の女王よりも更に大なる女王として彼女自らを見出したり。

是の故に、奥方と稱へかしづかるゝ堀夫人は、秋の扇の如くに棄てられける。長信宮中の草、年々愁處に生ぜり。

奥方の侍女名は藤、

彼女は堀家に仕へて奥向の職を奉ずる山口某の女なり。曾て若山を師として字を書き歌詠むことなど習ひしが、可憐なる彼女は此時其事ふる所に同情を表せざる能はざりき。

彼女は一藩の愁怨を聞て大膽にも恐ろしき決心をなせり。彼女はまづ其若山との師弟の緣を絶たんと欲し、一日彼女の部屋に詣りて、曩に請ひ得たる手本十餘帖に黄金二片を添へて出して言ふやう、『妾久しく御教を受けたれども、性質愚かなれば技もはか〳〵しから

ず。而して年已に闌けたり、復た之を學ぶの暇もあらじ。斯くて師の名を汚さんことは、本意なくこそおもほゆれ、あはれ弟子の籍を削りたまはれかし』と。

若山は强て止めもせで其請ふがまゝになしけり。

斯くて藤子は日々に若山のけはひを窺ひしが、若山は次第〳〵に邪まなる振舞のみつのり、今は一番中心に任せぬ事はなかりける。

一日藤子は晴夜の下に白小袖を着けつゝ、若山の部屋をおとなひぬ。部屋には彼女に附き添ふ女房共數多ありて、戯れ遊び居ければ、彼女は言へり『おほやけの事共聞ゆべき旨侍るに』と。數多の女房共は去らしめられぬ。

彼女は因てしとやかに坐し、言葉靜に若山の良からぬ振舞を責めける。若山は之を聽かで言ひ爭ひしが、藤子の言葉次第〳〵に鋭くなりて、やゝにじり寄るかと思はれければ、彼女は俄に起て奥に入らんとしぬ。

是に於て彼女等は共に立ちき。而して此部屋の主なる彼女の裾は、此部屋の客なる彼女の足に由て踏まへられてありき。此部屋の客なる彼女の左の手は、此部屋の主なる彼女の襟に其襟を執りつゝ置かれき。

『誰人か出會へかし』と一人の彼女は叫びぬ。

而して他の彼女の聲として、『生け置かば、殿の御家を覆へしなん、思ひ知れ……おのれ……』。

叫、物音。

周章て驚ける老士人は、倒るゝ如くに驅け入りき。彼は此時躍り上るまでに驚きの手に由て撲れき。血に染みたる短劍を握りし彼女は老士人に抱き止められぬ。他の彼女は走らんとして倒れぬ。前の彼女は老士人の手をおし放ちて後の彼女に掩ひかゝりぬ。上なる彼女は再び老士人の爲に抑へられぬ。

人々驚き集りて之を見るに、若山は赤になりて倒れ、藤子は其父山口 某にいましめられてありける。

如何に讀者よ、汝にも得堪へまじく見ゆる手弱女が、斯る恐ろしき企を決行して懼れざりしと想像するか。而も私怨のあるにあらずして此に至るべしと想像するか。

恐るべきものは敎養の力なり。源平氏以來養ひ成せし所謂武士道なるものは、此日に於ても猶纖弱なる少女兒をして、一身を擲ちて萬人の患を除くことを遲疑せざらしめき。

斯くて大膽なる彼女は、ひとやの中に繫かれて、氣色平日に異ならざりき。人に語て曰く『若山が喉を得刺さゞりし事の口惜しさよ。さばれ、後のひとふりは力を極めてゑぐりたれば、命の助かるとはよもあらじ』と。

纖手一搦を弄侮したりし女王は、疵癒ずして終に死しける。

藤子は法官の前に置かれたり。

法官言ふ『汝は心亂れたるか、何故に斯る不敵の事をば爲しつるぞ』。

『いやとよ、妾は毫も心の亂れしには候はず。若し公けのすじと私の怨とのけじめを知らまくおぼしたまはんには、請ふつばらかに述べ侍るべきに』。

彼女の言は爽やかなりき。彼女の視聽は正しかりき。」

法官は更に問はんともせで彼女を退かしめぬ。而して日を經て彼女に、若山を殺したりし趣旨を書き上ぐべしと告げぬ。

彼女は則ち若山の罪を數へて其意を明し、且つ、いへらく、

誠にさし出がましく恐れ入り奉り候へども、御代々樣の御恩を頂き候御家來に生れ、御家へ右樣のたゝりもの（若山を指す）つきて、殿樣の御爲めより、御領分の末々までの爲に相成り不申と、一心に存じ込み、日々御膳にむかひ、おねもじを頂き申候も、

御恩を忘れ不レ申ためにて、誰れしも同し御事に候へども、私事あさましく胸に堪へ兼ね候まゝ、御歴々の方々をさし置き、一存に決心致し、去る十日（天保十一年九月）若山様を切害もうし上げ候。

而して最も凛然たる語氣を以て之を結んて曰く、

いかやうの御仕置被ニ仰付一候とも、さら〳〵御恨み申す處御座なく候。かしく。

彼女は竟にあさましき網に覆はれたる駕籠に乗せられて飯田をさしつゝ都門を出でぬ。一邸の人は此の殺人者たる彼女を泣きけり。堀夫人は彼女が途上の費へにすべく五片の黄金を贈り、又彼女が亡き跡を弔らはしむべく三片の黄金を乗物の底に入れしめぬ。

彼女は飯田に去て再ひひとやの裡に置かれしが、信濃路の寒き夜な〳〵も、士人百姓町人に由て贈られし多くの衣もの夜のものゝ共に温かき夢を結びける。

而して彼女の罪は死すべく宣告せられたり。

三組の足輕は彼女を斬るべく命ぜられしに、誰一人の彼女を斬るべき手を有するものあらざりければ、劊手は已むを得ずして抽籤に由て定められける。

悲しき日は來りぬ。天保十一年十一月二日の夜明けけり。藤子ははや刑場の荒薦の上におしすえられぬ。

役人問て曰く、『世に言殘すべき事なきや』。

『何の言ふべき事も候はず。唯妾がなからん後、老ひたる父の重き御咎に逢ひたまはんか、これのみ冥途の心がゝりなり』。

役人は告げぬ『汝が父は已に其職を奪はれたり、然れども是れ法を正さんが爲めのみ、深く憎み給ふにはあらず。去れば久しからずして其職をば復せらるべし』と。彼女は仰ぎ俯してありがたがり、喜び色に動きける。

斯くて將に斬られんとせり、彼女暫く待たんことを請ひぬ。役人曰く、『汝、死を恐るゝか』。

『敢て死を恐るゝには候はず。いふもかゝやかしけれども、此日たま〳〵月のさはりあれば、死しての後ぞ耻かしき』と。
彼女は厠より歸て心靜に合掌しつゝ坐しぬ。使人は手拭を取て其眼を覆はんとしける。
『妾も武士の家に生れ侍るなり、などてか目に覆ふに及ぶべき』。彼女は微笑みて斯く言ひつゝ、櫛を其懷より取りて後れ毛を搔いなで、襟を開て斬られぬ。見るもの袖を濡らさぬはあらざりき。
藤子生年二十二、盛の花は散りけり。
彼女が辭世の歌一首、

信濃なる山路の雪ともろともに
春をもまたで消ゆる今日かな。

＊＊＊＊＊＊＊

偶聞けば遙に人の呼ぶ聲して、忽ちに馬を驅て來る使人ありき。使人か、使人か、使人何の齎らす所ぞ。
之を披けば『姻戚阿州侯の意に任せて彼女の死を宥さんと欲す』てふ主家の特赦狀なりけり。

繪畫

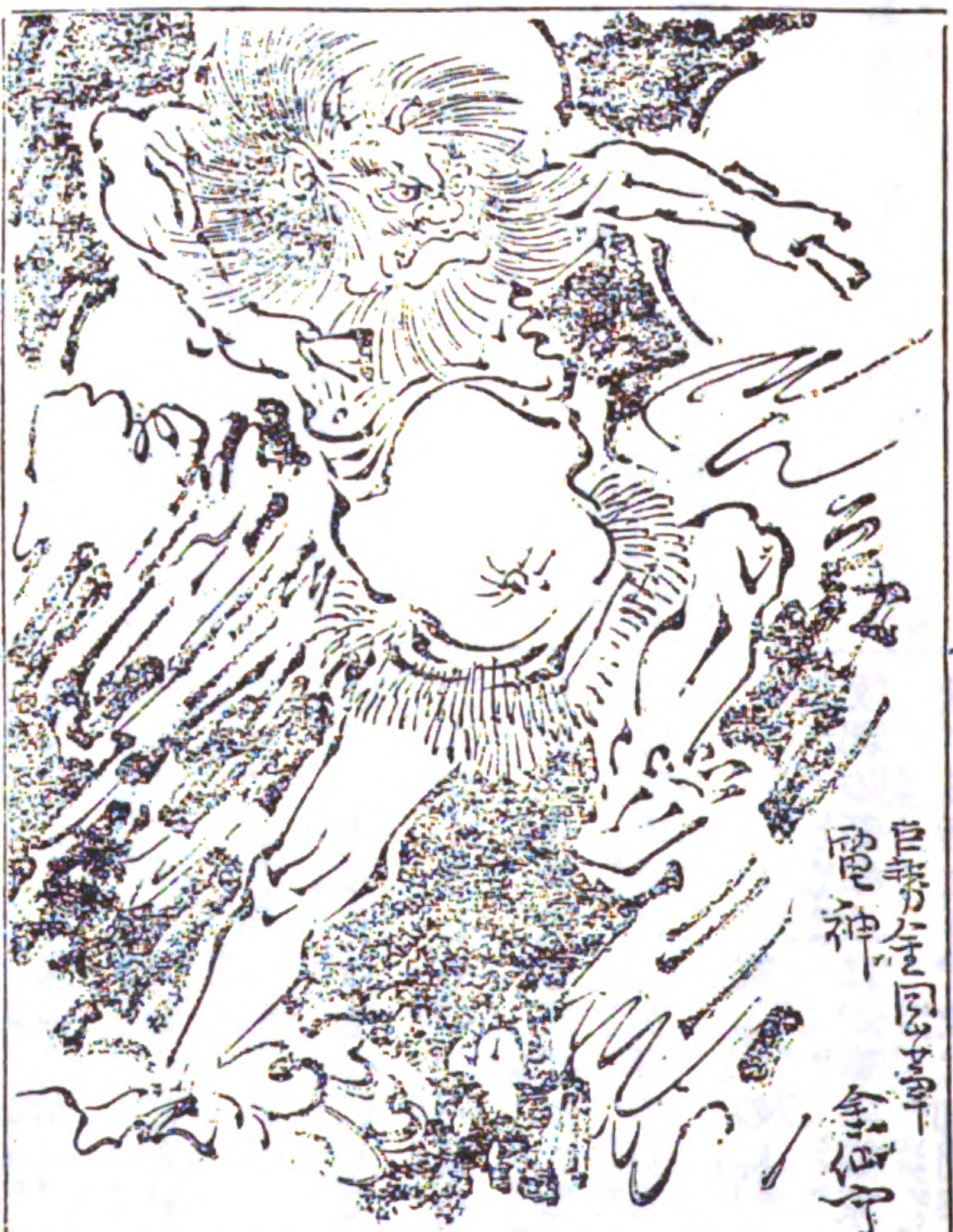
無聲詩話

（五）

日本の繪畫が佛教の輸入に由て忽ちに非常なる進歩をなしたりし事は吾人が前述したる所なり。而して此際主として畫かれたる佛畫は初め三韓を通して入り來りしものにて、頗る印度風を帶びたりしが、後遣唐使の往復愈々頻繁なるに及び、一變して支那風となりぬ。」
巨金勢岡は其初古風の佛畫即ち印度風のものを學び、之に唐の吳道子の筆法を加へ、遂に一種の日本畫風をなしたりしものにて、勁且細なる線を畫き、之に紅綠の濃彩を施したりき。筆意極めて謹嚴精密なり。

彼は日本古畫家の翹楚となりしだけありて其道に於ける勤勉一方ならざりける。彼は行路難の到る處に歌はれたる當時に於て、能く其彩毫を遠く東のはてまでも擕へ、名山大川の勝を探りて其風光を寫し丶と云ふ。

彼はもと中納言巨勢野足の子、清和陽成光孝宇多醍醐の五朝に仕へ、從五位下采女正又隼人正たり。陽成帝の時孔子の像を畫き、宇多帝の仁和四年秋有名なる賢聖の障子を畫きき。



世俗傳ふ、彼が朝餉の御間に畫きし馬は夜なく出で丶萩の戸の萩を食ひ、彼が仁和寺の壁に畫きし馬は近傍の稻田を蹂み、其蹄に泥土をつけたりと。事虚妄なるは固よりなれども、亦以て彼が畫の如何に巧妙なりしか、如何に其巧妙を世俗より驚かれしかを見るに足るべし。

去れば彼は啻に佛畫を畫きしのみにあらず畫馬に妙なりしのみにあらず、山水を畫き、花鳥を畫き、傍ら造庭法をも能くしたりき。蓋し彼は王朝の一大美術家なりしなり。

彼が子孫公望公忠弘高等皆高手なる畫家にして、其流遂に巨勢派として一家の風を傳へぬ。

金岡の子相見。相見の子公望公忠、村上冷泉圓融ごろ

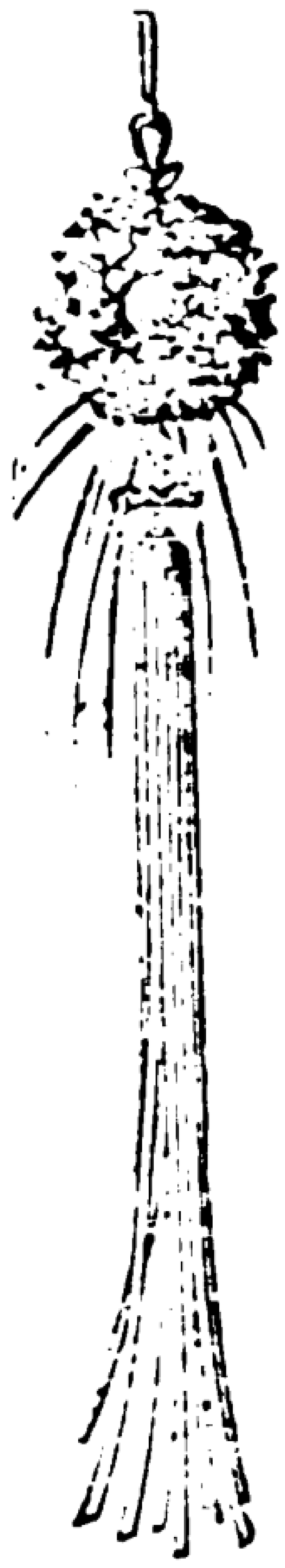
の人。正に王朝の擾亂たる時に當り、世は已に支那の文明を倦みて、遣唐使の如きも止み、從て國粹の趣味大に興り、源氏其他の物語類偏に世にもてあそばれぬ。是の故に繪畫の趣味も自ら一變せざるを得ずして彼等は更に新樣なる畫風を出し、畫風をも畫題をも多く日本的となせり。而して從來の寫生畫も漸く寫意畫となり、想像によりて自然の風物をも畫くに及びぬ。

公望と時を同ふして飛鳥部常則ありき。

公望の孫、弘高、曾て地獄の圖を作る。

宅磨爲氏、弘高と同じ時なり、子爲成共に名高し。精緻なる佛畫を作りたりき。

近衛帝の時に宅磨爲遠あり。



時事一斑

文部新學政の反抗者

曰く大日本教育會、之を辻新次黨といふ。曰く國家教育會、之を伊澤修二黨といふ。彼等は共に國家主義の教育を主張するものにして、一時は一種の文部宗をかたちつくりしもの、一旦些細なる事より相分立したりしが、今や彼等は再び相聯合せんと欲するに至りぬ。そは何の爲に、文部の新學政に反抗せんが爲めに。

文部の新學政

文部の新學政は、寧ろ國家的教育主義に遠ざからんと欲する者なり、彼は御用學校よりは國民學校を好み、官吏學校よりは實業學校を好まんとするものなり。彼は亦一の改革者なり。

彼が改革に反抗して

彼が改革に反抗して、舊勢をもり返さんとするは、現時の保守派たる辻黨なり。伊澤黨なり。故に彼等は九月九日大日本教育會の紀念會をなして、伊澤修二氏叫べり『辻君萬歲』。辻新二氏叫べり『伊澤君萬歲』。

女學海の潮

女學海の潮は、再び漸く滿ちなんと欲すと、候潮者報す。

犯罪者の增加

明治廿四年末の全國在監獄者、七萬千八百四人。廿五年末には七萬五千五百八十五人。本年の四月に至りては實に七萬五千八百七十二人ありき。何ぞ犯罪者の增加すること此くの如くそれ甚しきや。

世事歎すべきもの亦なしとせざるなり

一縣の醜業婦取締掛長たる廣島福岡香川三縣警部長は、自ら醜業婦を弄して事露はれき。而して其露はれざるものは、何ぞ啻に彼等警部長のみならんや。世事歎すべきもの亦なしとせざるなり。

燈火親むべし

燈火親むべし、暑熱は去て涼風と長夜とは來りぬ。紅顏の兒、短檠の下、床しきものは琅々たる伊唔の聲にあらずや。

寄書

家庭の音樂

有、無、

家庭は地上の樂園なり、恒久の樂みある所ならざるべからず。

男子終日勞作して歸る、彼等が四肢は疲れたり、彼等が心神は煩悶せり、彼等が元氣は沮喪せり。若し家庭にして之を慰撫安愉するにあらずんば、彼等は何れの地に向ひて其新勢力を養ふを得んや。

人は恒久に緊張する能はず、勞働すれば休息し、勵むれば又樂まざるべからず。故に家庭に樂なきものは多く樂を家庭外に求むるに至る、樂を家庭外に求むるに至る、不祥これより大なるは莫きなり。爲に幾多の罪惡は踵を接して起るべし。

家庭を樂しくするに道あり。或は之を精神的に求め、或は之を物質的に求む。中にも音樂なるものの如き、家庭を樂しくするに於て最も有力なる道具ならずんばあらず。

多言するまでもなきなり、泰西人の家庭に相和して歌はるゝ讃美歌のみにても如何に彼等が其家庭を樂しくするかを思ふべし。

蓋し音樂は人を困憊より甦らしむる魔力あり、元氣を死したる骸(むくろ)に吹き込むの妙用あり。かの煮ゆるが如き煩悶も妙音に接たれては水の如く澄むべし。かの山の如き不平も美聲に觸れては雲の如くに消ゆべし。

思へ、試に。

若し困憊して歸れる良人が樂しき晩餐を終へたる時、其愛するものゝ艶やかなる手に由て死したる樂器が玉を碎かんず美音を發し、其愛するものゝしほらしき唇に由て多嬌雲を停めんとする歌の歌はれたらんには、彼が終日の勞は早く已に償はれて、彼等の愛は相見る毎に新なる心地やせん。

斯る樂しき間に育せられたる子女は、如何に氣高く生ひ立つべきぞ。如何に樂みに富んで生ひ立つべきぞ。邪惡の念は生ぜんと欲する得べからざるなり。

去れば音樂の家庭に於けるは、猶麗らかなる日の春の野に於けるが如し。春の野は麗らかなる日なしには花は匂はざるべし。家庭は高雅なる音樂なしには樂みは舞はじ。

故に音樂は能く其家庭を樂しくするのみならず、從て其樂みを高尚にす。

唯其樂器樂詞の如何に由ては却て大なる害を生ずる事なきにあらざるべし。

三絃の靡々たる如き、之に伴ふ歌詞の淫猥なる如き、則ち家庭の清淨を傷つくるに足る。

清淨ならざる樂みは、盡(つ)くべきの樂なり。

宜しく泰西の樂器を用ゆるか、若くは箏の如きものにて歌曲の好きものを擇ぶべし。今、日本樂に於ては、滿足して用ゆべきもの少きを以て、宜く此等を用ひ、以て音樂改良の日を待たざるべからず。

吾人は音樂の家庭に於ける用此くの如くそれ大なるを知るが故、滿足せる音樂ながらも、之を勸めて已ます。



家庭雜誌

發行日改正 毎月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵稅共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)前金	五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)同	金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢
○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便局

發行兼印刷人 坂田純明
編輯人 塚越芳太郎

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行